

畿山河

第26号

別冊
講演録

平成25年5月15日

発行

公益社団法人沼津牧水会

若山牧水顕彰全国大会

記念講演「牧水と旅」 馬場あき子

座談会「女流歌人、牧水を語る」

栗木京子、小島ゆかり、米川千嘉子／司会

伊藤一彦

日本ほろよい学会

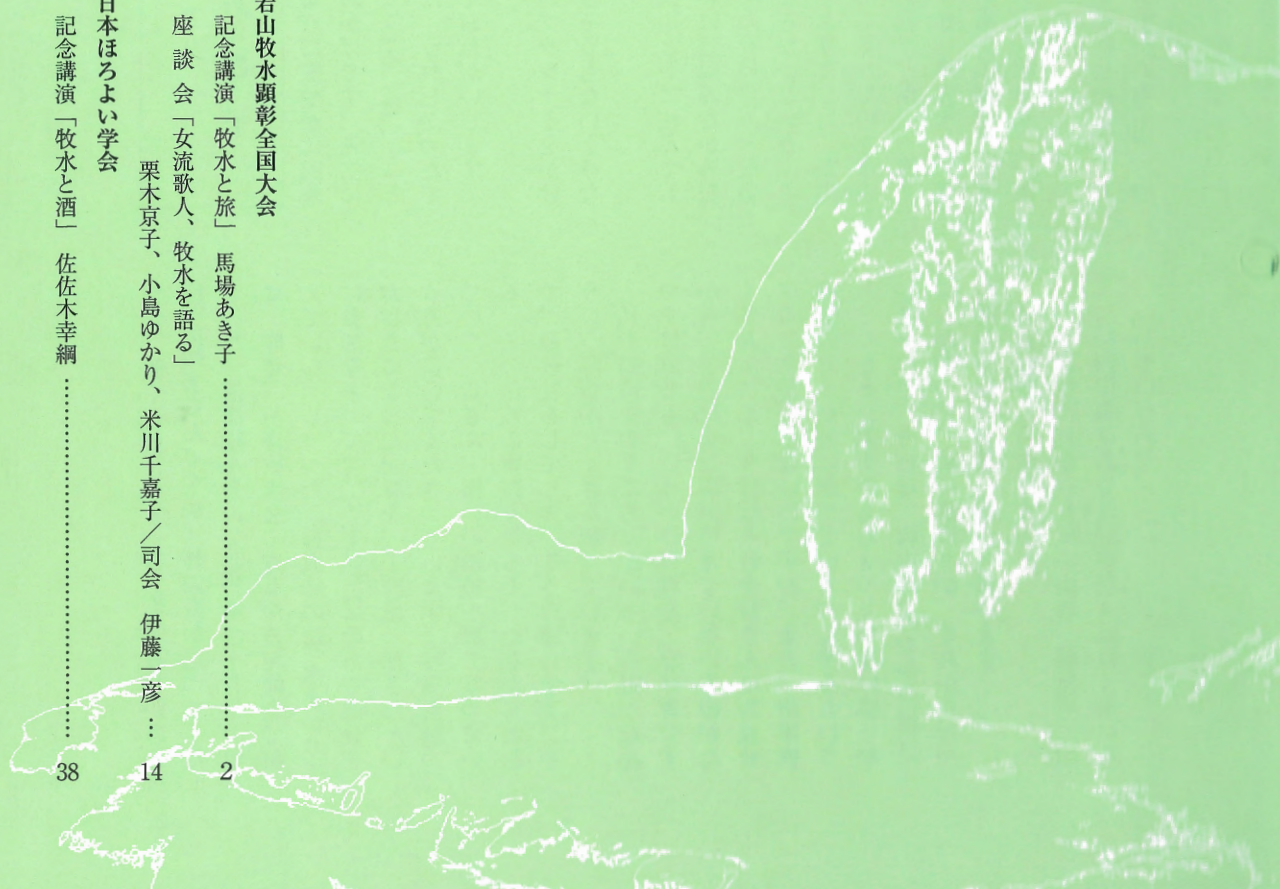
記念講演「牧水と酒」

佐佐木幸綱

38

14

2



若山牧水顕彰全国大会

記念講演 「牧水と旅」 馬場 あき子



司 会 林 茂樹) 皆さまお待ち兼ねの馬場

あき子先生による「記念講演」です。

馬場先生につきましては、お配りしてございます資料に、先生の今日までの歩みについて簡単に記してありますので、それをご覧ください。

「本誌の十三頁下段に掲載」
馬場先生は、私とは十違い・・・昭和三年のお生まれです。私と同年じゃないかと思うくらい若々しくいらっしやいます。

この全国大会が、このように賑やかに開催できますのは馬場先生のおかげです。先生に記念講演をとお願したところ、「はい」と快くお受けくださいました。うれしかったですね。馬場先生、よろしくおねがいます。

馬場あき子 何か、すごいプツシャーをかけられている(笑)。話ができそうもないような気がします(笑)。

私も長らく東京とか神奈川とかに住んでおりまして、それであるからには、『みなかみ紀行』という牧水の紀行文があるので、一遍廻ってみなければどうにもならないという、そういう気持を長らく持っておりました。案内をしてくれる人が名乗り出てくれたのを幸いに、今年の八月の暑い暑い日に、前に一度そこを廻っていらっしやる伊藤一彦先生と、今日の座談会のパネリストの米川千嘉子さんと一緒に、「みなかみ」をずーと廻らせていただいたんです。

牧水がね、みなさんよくご存じかしら、大正十一年十月二十一日、沼田市の鳴滝館なるとかたに泊

って、明くれば、二十二日から「みなかみ紀行」が始まるんですが、林先生が送ってくださった、沼津牧水会の『会報』第二十五号の中に、昨年、沼津牧水会の方々が暮坂峠まで越えていらっしやった、暮坂峠の「牧水まつり」に参加なさって『みなかみ紀行』のある部分をお歩きになった記録を、千野慎一郎さんという方が書いてくださっています。写真も載っていて、皆さん、揃いの法被はっぴを着て写っている。この法被の軍団を見ると、たじたとして、最敬礼をしてしまいそうな感じですよ。そういう写真がたくさん載っています。

私も鳴滝館のところとかいろいろ寄ったんですけれども、こういう写真を、怠け者ですから、手許にまだ現像できていないものがたくさんあって、今日はそれを皆さんにお見せすることができないのですが、まあ、沼津牧水会の方々が既に廻っていらっしやるというところをまた話すのもちよっと切ない感じがします。今日、今日は、牧水の『みなかみ紀行』にしたがって、私の感想とか、それから行った時の何かをお話したいと思います。

最初のところを見ますと、
今日はこちら九里の山奥、越後境三國みくに峠の中腹にある法師温泉まで行く事になっていたのだ。

というのが冒頭に出て来るんです。私たちが沼田から法師温泉までまっすぐ行ったわけじゃないんです。けれど、牧水は九里の山奥へ一日で行っちゃうんです。四×九、三十六キロ歩いてるんです。しかもまっすぐ歩いたわけじゃないんですね。あっちこっち寄ってるんです。そういうことで、牧水の旅の足の足つというものが生半可な足じゃない。昔の陸軍の兵隊さんが歩くくらい、しかも特別訓練で歩くくらい歩いているわけなんです。山越えの九里の道つというのには実にすごい。牧水の足のすごさつというのを感じさせるところなんです。我々行くとね、三國峠の腹にあるかどこにあるかわかんないんですよ。車で行っていますからね。ところが足で行くとね、山の中腹であるつということが如実にわかるわけです。

私は今回の「みなかみの旅」をさせていたでいて、猿ヶ京という所の、これは牧水も書いておられますけれども、猿ヶ京という非常に魅力的な地名があつて、そこに温泉が湧くつてことを書いていますが、そこが、昔の牧水の頃と今の猿ヶ京とは少し地形が地理的にもちよつと移動があるらしくて、今の猿ヶ京とは少し違うあたりにあつたらしいんですけれども、そういうところに寄るわけなんです。

私たちは、その猿ヶ京という宿屋に泊らせていただいて、実は今日もその宿屋の持谷さんという女将とご主人、経営者がご夫婦でいらつしやっています。その方は、猿ヶ京のホテルで牧水、それから与謝野晶子の行つた跡を詳しくお調べになつて、ご自分で与謝野晶子文学館もお持ちになつていて、持っている資料も、びつくりするような物を秘蔵している資料も、いろいろあります。旅館の前にも牧水の碑が建っていますし、詳しく調べていらつしやる大変な知識を持つていらつしやるお方なんです。今日その方がいらつしやるなければ、しゃべりやすかつたんですけれど、運悪くその方がいらつしやるんですね。これもまた、プレッシャーになつておりまして(笑)・・・。まあとにかく、この日の牧水の旅の一日は、九里歩くわけです。月夜野つきよのというところから赤谷川あかやがわの流域を行きまして、

登るともない登りを七時間ばかり登り続けた頃

というんです。登るともない登りを七時間登り続ける。ここで私は、もうびつくり仰天してしまつて。現代の我々の足つて、何とだめになつちやつてゐるんだらう。そして、

七時間ばかり登り続けた頃、我らは氣にしていた猿ヶ京村の入口にかかつた

という、そういう記述に驚かされるわけなんです。

まあ、私なんかは、生涯で一生のうちで、さつき林先生がおつしやつたように、八十四歳まで生きていて、一番歩いたのはどのぐらいいかな、と思うんですけれど、戦争中に「空襲でおまえの家は焼けたらしいから帰んなさい」と言われて、三鷹から高田馬場まで歩いたのが最大の距離なんで、あれ何キロあるのかなあと、いくら勘定してみても二十キロないんじゃないかなと思うんです。そういうようなわけなんです。

「牧水の旅」は、基本的に歩く。歩くわけですから足元が見えるんですね。どんな草が生えていて、どんな木が立つていて、そして土はどんな感触かつていう、そういう登り七時間なんですけれど、そういう時に牧水の旅の特色が出る。というのは、M君という自分の同人誌の会員の家があつたはずだと。その人はまだ若いけれども、とても氣になる歌を作つている。そうすると、そのM君の所に寄つて行くことになるわけなんです。これがねえ、やつぱり「牧水の旅」なんです。氣になる所に全部寄つてしまふ。我々は、時間が決まつていて、タクシーで、あるいはバスで走つてしまつて、六時までには宿屋に入らな

やいけないという旅ですから、仕舞いに何にも見ないで夕暮れの空ばかり見て、お酒のことを考えて宿へ着いちやうという、そういう旅ばかりやってるわけなんです。で、牧水は

街道から曲り、細い坂を少し登ってゆくと、傾斜を帯びた山畑が其処に開けていた。四、五町も畦道を登ったけれども、それらしい家が見当らない。

というそういう風なことを細々と書いていくわけなんです。そういう牧水の旅というもの『みなかみ紀行』は書いてるわけなんです。畑仕事をしている人に道を訊くとね。

畑に挟まれた一つの沢を越し、渡りあがった向うの山蔭の杉木立の中にある。

杉木立の中にMさんの家はあるって、こういう道の教え方っていうのね、昔はそうでした。私も『歌枕の旅』っていうのをずっと続けていた頃に、こういう道の教え方をされてましてね。村の人が「ここをまっすぐ行って、突き当たったらそこを右に曲がって、ちよつと行ったところに竹藪があるから」ってこう言うんですね。ところが、「まっすぐ行って」っていうのはだいたい一里はかかるんですね。それから、その「ちよつと曲がって」って言うところだ、二キロぐらいあって、竹藪なん

かなか出て来ないんですよ。そういううな、何というか、道の教え方の中に、その風土とか、それからその人たちが踏みしめている大地の味わいとか、道の道たる謂われ、そういうものが見えて来るわけなんです。

牧水っていう人は、茫洋としているようですけれど、実に細かい小説家はだしの観察眼を持っています。向こうから人が歩いて来んです。たまたまその歩いて来たのがMさんだったんですけど、その風俗をこんなふう

に書いています。
囚人などの冠のような編笠をかぶり、辛うじて尻を被うほどの短い袖無半纏を着、股引を穿いた、老人とも若者ともつかぬ男が其処の沢から登って来た。

我々は、行きあつてもね、背広を着ていたか、徳利襟だったか、中はワイシャツだったか、なかなか覚えていない。それは、我々が人間との出会いに慣れ過ぎてしまっている。人間の観察っていうものが非常に疎かになっているんですね。出会った人物っていうのはどんな服装をしていて、その服装は何故そういう服装をしているのか、農民の定型の服装ですけれども、編笠を冠ってお尻までしかないような半纏を着て、袖なし半纏を着ている。股引を穿いている。これが野良仕事の定型の服

ですけれども。でも、我々は会った友だち、一緒にご飯を食べて一時間もしゃべっていたのに、その人が何を着ていたか、覚えていないことがしょっちゅうです。これは、やっぱり見えないっていうか、何か都会人の悪い習慣が付いちやつているんじゃないかな・・・。

出会いを一瞬の細密な観察って言うんですね、牧水は。ですから、記録する目で旅をしている。旅をする時に、牧水の目は、記録する目を持っている。そして、その晩、あるいは一日置いてでも、それをこつこつと書き込んでおくわけなんです。心に留めたものを全部自分の所有物として、記しておきたい。そのくらい牧水は、旅およびそこで会った人や、情景を愛していた、ということになります。これが自分のものとして、人物像が書き込まれていくわけなんです、牧水は。彼は三十歳前後の青年だったとあるけれども、実は二十五歳だった。そして、自分の家まで主宰者が足をのばしてくれたことに感動して、法師温泉まで同行することになるわけなんです。実は、私たちも、この牧水が書いた細い坂を上って、Mさんの家も訪ねました。これはみんな持谷さんのご案内でできたことなんですけれども。

Mさんのご子息に当たるのか、かなりのご

年配の方が、一人座っていらつしやつて、そして牧水の条幅じょうぷくをお持ちになつてゐる。やはり「幾山河」でしたつて、伊藤さん。

(伊藤一彦) いやいや、「かんがへて・・」
じやなかつたかな。

あ！「かんがへて・・」だ。ごめんさい。一緒に行つた人がちゃんと前にいるんで(笑)。「かんがへて飲みはじめたる一台の二合の酒の夏のゆふぐれ」という、あの「お酒の歌」を実に達筆で流れるような筆で書いてある条幅ね。お菓子の箱に丸めて入れてあつた。これがいいんですね、やつぱり。でも、染みが一つも出ていなくて、その丸めて入れたお菓子箱が非常によく保管されていて、それを掛けて見せていただいた。それが、この日の大変素晴らしい思い出として残つてゐるんです。昔もそうだったでしょうけれども、非常に簡略なお家でね。やつぱり今も暮らしていらつしやるのを見て、何か私は非常に感動したことなんです。

それで、やつぱり一つ、もう皆さんよくよくご存じのところなんですけれど、やつぱり言つておきたいのはね。牧水の「みなかみの旅」は何だつたかつていうと、これは地名として「みなかみ」という地名もありますけれど、同時に、利根川の上流がどんなふうになつて

いるのかつていうことが見たかつた。何故そんな上流が見たいのかつていうと、これも大正十一年十月二十二日のところに、ちゃんと書いてある。

私は河の水みなかみ上というものに不思議な愛着を感じる癖を持つてゐる。一つの流に沿うて次第にそのつめまで登る。そして峠を越せば其処そこにまた一つの新しい水源があつて小さな瀬を作りながら流れ出している、という風な処に出会うと、胸の苦しくなるような歓びを覚えるのが常であつた。

まあ変な人だなあ、と思う前に、どうしてなんだらうかつていうことを考えると、牧水は、川つていうものに対して、例えば利根川も、大きな銚子の河口で見る利根川が、どんなふうにしてあんなに大きくなつたのかつていうのを、引き算しながらずーつと登つていくわけですよ。逆に言えば、足し算しながら下に降りてくるわけなんですけれど。

清水越しみずこえの山から流れ出して来た一支流が湯檜曾ゆひそのはずれで落ち合つて利根川の溪流となり沼田の少し手前で赤谷川あかやを入れ、ややつた処で片品川かたしなを合せる。そして漸くまじまじ一個の川らしい姿になつて更に洪川おほとぬで吾妻川を合せ、此処で初めて大利根の

大観をなすのである。

というわけですね。段々段々足し算しながら太つていく川つていうものの姿を眺めるのが好きだつた。私たちも車から所々降りしていただいて、片品川の流れとか、吾妻川の源流の方まで、いろいろと見せていただいたんですが、足で歩いた旅じゃない悲しさは、見たつていう記憶はあるんですが、みんなそれが部分なんです。そういう部分の断片なんですけれども、それを今つなぎ合せて『みなかみ紀行』を読むと、「ああ、これがあそこだつたのか！」つていうような感動が上がつてくるという、そういう感じをしております。

一日九里の旅をやるわけなんですけども、そういう、その牧水の旅の何ていうのかな、自然と出会い、そこにある親しい人間がいる。初めて会つたのに、その人間はものすごく親しい人間に見える。それはどうしてかつていうと、やつぱり足で歩いてきた感覚と、訪ねて行つた情熱と、そういう肉体改革と、それから、風景つていうものが一緒になるからなんです。例えば、芭蕉の句に

草臥くたびれて宿やどかる此こゝや藤の花

というのがあります。

「草臥れて宿かる此や」。こういう肉体感が

ないよね。やつぱり藤の花っていうものが、宿屋に咲いている藤の花っていうものが、身に沁みないという、そういう、その旅人感っていうのがやつぱりあるんですね。私たちは藤の花は藤の花だけ観賞してしまう悪いくせを、都会人として身に付けちゃったんじゃないか。旅も点から点に行く線、このAからBに渡るプロセスが旅なんだっていうことを忘れて、点から点があつて次の点、この点だけを鑑賞するのを旅だといつの間にか考えてしまっている。そういうところがあるような気がします。

ところで、そのMさんについてなんですけれど、一体Mさんって誰なのかっていうと、土地の郷土史家の方が手渡してくれたプリントを夢中でいただいて来たんですけれど、出典が書いてないんですよ。これから出典をたずねようかと思いますが、下新田しもしんたというところにお住まいの森下まさみさんという方の文章です。

Mさんは松井太三郎さんという人であつたというところで、松井太三郎さんの家を訪れた時の牧水の文章を、かなり長々と引いていますが、その中で、

湿った庭には杉の落葉が一面に散り敷いていた。大きな囲炉裡いろりばた端には、彼の老母

が坐っていた。

お茶や松茸の味噌漬が出た。

現代なら、松茸の味噌漬けて、大変素晴らしいものですが、あの当時は野のおかずに過ぎなかつた。

私は囲炉裡に近く腰をかけながら、「君は何処で歌を作るのです、此処ですか。」と、赤々と火の燃えさかる炉端を指した。土間にも、座敷にも、農具が散らかっているのみに、書籍も机らしいものも其処らに見えなかつた。

松井太三郎さんは、口ごもりながら、

「何処という事もありません。山でも野良でも作ります。」

と言つて答えたのを、牧水は感動するわけですね。実際は牧水だって、書くのも、あの時は鉛筆じゃないでしょうね。やつぱりその、何を持つていたでしょうかね。牧水の筆記用具って、伊藤さん、何ですか？

(伊藤一彦) 筆でしょうね。

筆ですか、やつぱり。やつぱりね。筆と紙を持つていたんでしょうね。そして、そういうものをしょっちゅう持つていて、村でも山でも、どこでも作つたわけですよ。

そして、そこで、三時までいまして、そこからまた三里歩かなきゃならないんです、法

師温泉までね。猿ヶ京の村は、Mさんを訪ねることで終っているんですけど、この三時から、また三時間にわたつて、この牧水の旅は、歩く旅がつづいて。猿ヶ京に、この時は泊ることはなかつたようですね。

とにかく、それから九里の旅の、その最後の三里というところに、かなり大変な吹路という坂道が、長い長い坂道があつて、吹路という急坂を登りきつた頃から九里の山越えがやつと終わるんです。その中腹に、この法師の温泉があるんだけど。私は法師温泉に行つて、中腹で会おうとはとても思わず、山の中腹っていうのは、後で読み返してみても、あれは中腹だったのか、と思つたんですけれど。そういう山を越えて行くわけなんですけど。道端の畑で稗や粟を刈っている人を見た。私が行つたときは田圃も何も違つていて、稗や粟などはとても作つていない野菜畑だったんですけれど。

牧水はいち早く、その稗や粟というものを目をつけて、こういうところでは、こういうものしか穫れないのだと言っています。牧水の故郷の宮崎は、今はお米も美味しいし、野菜も美味しいし、果物も美味しいし、素晴らしいところですよ。牧水の小さい時暮らした坪谷がどうだったかわかりませんが、牧水は

ここの村に、ある共感を持ったのかも知れない。こういうものしかできない、そして常食もだいたい稗か粟だというところに目をつけて、この村の人たちの慎ましい生活ついで、ものをまず観察するわけですね。かすかな夕日を受けて、煙草の花も少し目についたわけです。煙草なども、あの頃はそういう小さな村落で植えている。私の田舎でもそういう煙草の花を見ましたけれど、花は綺麗ですね。本当に夏の終わりに煙草の花を見ると、そぞろに郷愁がわくような感じの花です。綺麗な。そしてとにかく、道は暮れてしまう。

山の中の一すじ路を三人引つ添うて這うようにして辿った。そして、峰々の上の夕空に星が輝き、相迫つた峽間の奥の闇の深い中に温泉宿の灯影を見出した時は、三人は思わず大きな声を上げたのであった。

今こうした肉体感を伴った旅つていうのは滅多にないんですね。我々弱くなっているから、バスで着いて宿屋の灯を見たときは、やっぱり歓声を上げます。だけど、それは肉体感のないバスに揺られた肉体感なんですね。そういうような時代になっていて、非常にそのへんが残念なんですけれども。まさにそこで、湯殿に急ぐ。牧水って本当にお湯

が好きだったんですね、温泉。行くとまずお酒かと思うと、そうじゃないんですね。まず酒を飲まないで、まずお風呂に浸る。その歩いてきた道の風土と大地の感じと畑や森や木立や、そういう中を通り抜けて来た体を、その土地から湧いているお湯にその体を洗めて暖める。そういうところに、旅の醍醐味つていうのを感じているわけなんです。そして、

部屋に帰ると炭火が山のようにおこしてあった。なるほど山の夜の寒さは湯あがりの後の身体に浸みて来た。何しろ今夜は飲みましよう、

何か今晚のようですけどね(笑)。そして豊かに酒をば取り寄せた。

ここのもので、非常にその当時の旅のおもしろさを感じるんです。缶詰をね、一つ二つと切らせた。何の缶詰を切ったのかなつて、これも伊藤さんわかるんじゃないかね。牧水博士だとわかるんと思うんですが。あの頃の缶詰で一番いいのは、鯨の大和煮とかね。牛肉の大和煮と言いたいですけれど、まあ山奥だから鯨の大和煮とかってあったんですね。そういう缶詰を、われわれ子供の頃ね、よくお客が来ると取つといてね、それをキコキコ開けてすぐ出したもんです。そういうものを取り寄せるつていうのは特別、別誂えで

出すんで、大盤振る舞いを牧水はするわけなんです。

U君は十九か二十歳ですよ。M君は二十六七。その二人の若者ががっしりした体を見ているうちにね。非常にそれから明るい顔をしている。がっしりした体を見ているうちに、牧水はうれしくなっちゃうんですね。おもしろいですね、こういうところが。若い、明るい、肉体感。それからその顔立ち、気力。そういう生気みなぎる青年を見たときの、何だかうれしくなってしまう。あの「みなかみ」を見たときも、何だかうれしくなってしまう。その川がだんだん流れが太くなっていくのを見たときと、それからその力ね。川がたくさんの小さい流れを集めて段々太くなつていて、成長していくような川姿を見ているとうれしくなるのと、何か青年を見ているうれしさが、どっか、こういうふうな文脈の中では同じような感じがしているところが、大変おもしろい感じがします。

其処へ一升壺を提げた、見知らぬ若者がまた二人入つて来た。
わけなんです。

一人はK君という人で、今日我らの通つて来た塩原多助の生れたという村の人であつた。一人は沼田の人で、阿メリカに

五年行っていたという画家であった。画家を訪ねて沼田へ行っていたK君は、其処の本屋で私が今日この法師へ登ったという事を聞き、画家を誘って、あとを追って来たのだそうだ。

そして、やっぱりこの人も法師まで歩いて来たんですね。だから三十六キロとか四十キロってというのはこの時代の人たち、若い人たちが歩く、そりゃ一生懸命歩くでしょうけれども、歩く道だったってということ。非常に驚くべきことに私には思えません。

そして、これKさんとかMさんとかUさんとかって書いてあるわけなんですけど、実に今度、沼田に行きましたら、この沼田ってところは、何と牧水の旅の跡ではなくて、やっぱり沼田のかつての名士であつた生方家っていうのですね。歌人の方も多いいと思いますから名前はお存じでしょうが、生方たつゑさんという方は嫁ぎ先が沼田にあつて、その生方さんの家は角藤さんという。角に立っているのので、藤が咲いていたかどうかは分かりませんが。角藤さんという沼田一の大きな薬局だったんですね。漢方の薬屋さんだったんです。そのKさんというのは、生方たつゑさんが後で随筆に書いていますが、これは生方吉次である。

生方吉次がKさんである。そしてアメリカに五年も行っていたという画家は生方たつゑの夫の生方誠である。誠は、誠実の誠です。生方誠であるっていうふうを書いていらつしやいます。その二人が、つまり生方家の二人が牧水の後を追つて来て、そして、そこでまた宴会になるわけなんです。それで、そのK君はずっと老神までついて来たわけなんですけれど、その後ずーっと。二十三日には法師を発つて牧水は元へ戻るかたちで、湯宿温泉に疲れて泊つてしまふ。そして、そこでまた、林銀次つて人が訪ねて来る。

このあたりの人は、九里や十里の道のりは、ほんのちよつと隣りに行くようなつもりで歩いているらしい。

そして、二十四日に、湯宿温泉で歌会をやつて、そしてまたずーっと、このK君はくついで来るわけなんですけど、K君が最後に牧水と別れる時に、雨が降つていた。それで、唐傘を持って来るわけです。買つてくるわけです。どっかからね。法師を発つた牧水が湯宿温泉まで来て疲れて泊つた。そして二十四日は湯宿温泉で歌会をやつて、二十五日に、K君はずーっと老神までついて来た。それも、宿下駄を履いて、帽子もかぶらない姿で、普段着の本当の姿でやつて来た。

路はずーっと片品川の岸に沿うた旧道で、老神には夜に入つて着いた。そして、老神温泉では、この湧湯があつて、しかも川原の中の湧湯のぬるいのに長く浸るわけですね。ここでは、赤谷川で取れた川魚の甘味噌焼きと、それからお酒なんですけど、その甘味噌焼きを、うまい！うまい！と牧水は二皿まで食べた。ずいぶん粗食な旅だなあ、と。今の我々の感覚では、鮎の田楽とそれからお酒、あとは、お汁と煮物っていうような、そういう旅なんです。

翌日起きて見ると、雨が降っている。ひどい日和になつている。朝起きてびっくり仰天したんですね。雨戸の隙間を眺めながら、困つた困つたと思つていると、番傘を買つて来た。自分も大きな油紙を買つた。そして雨の時の旅の風俗はお尻から下を丸出しにして、お尻から上の方は首まで油紙に包まれて、両手だけが出るようにしてやつたというんですね。お別れのとぎにね、傘をKさんから手に受け取つて、そこに歌を書くわけですね。

なんていう歌だったかな。あつ、こういう歌です。

かみつけのとねの郡の老神の時雨ふる朝
を別れゆくなり
そして、さらに

相別れわれは東に君は西にわかれてのち
も飲まむとぞおもふ

というのを書く。別々に飲んでいても、やっぱり思いながら飲めば、一緒に飲んでいるような。そういう酒ですね。

このとき、生方吉次さんは二十九歳の青年だった。

その後、番傘をどうしたのかっていうのが今も問題になっているんですね。沼田に舒林寺じゆりんじっていうお寺があります。沼田の近くの沼田城ぬまたじょうっていうところに、真田幸村のお父さん（昌幸）がいたことがあるんです。

舒林寺には、真田の一家のお墓があるんですね。それで、その舒林寺に行きますと、ご住職が出て来てね。傘のお話をしてくれましたが、なんで舒林寺に傘があるんだろう。たしか老神温泉にあった傘がどうしてここに

あるんだろうと思うと、まあ、今、自分のところにはないんだ。でも、そのことを非常に気に止めていて、お寺のお墓、墓はかっていうのはおかしいですね。墓じゃないんですよ。傘のお墓かさのみっていうのはおかしい。傘の碑いしが墓地の中にあるんですね。そこに行きますと、この傘の形をしたお墓、お墓じゃない（笑）、碑いしですね。碑いしにこの歌が書かれています。

その傘の碑いしの除幕式が行われた話なんかも、

そのご住職さんが覚えていて、お父さんの時代のことですけれど、ずっと覚えていて、非常に細かくお話をしてくださいました。

昭和六十一年十月二十日がその除幕式であったと書かれています。午後三時から旅人さんが出席してくださいまして、盛大な除幕式が行された。牧水生誕百一年目のことであつたと書かれています。そのような傘が今どこにあるんだろう。燃されちゃったとか、棄てられちゃったとか、そういうことはないはずだ。たぶん生方さんの誠さんの家にあるに違いない、と、そのご住職はおっしゃっていました。

誠さんの、生方たつゑさんのお嬢さんっていうのは、美智子さんとおっしゃいまして、料理家なんですね。お料理の専門家で、時々テレビにも出ていらつしやったんですが、私より一つ下だから、この頃は出ないんじゃないでしょうか（笑）。

それで、美智子さんは春日町に確か住んでいらつしやったと思うんです、文京区のね。そこへ問い合わせてみましたけれども、「わからない」とおっしゃいます。本当はあるんじゃないか、と舒林寺では言っています。だが、美智子さんは「ない」と言っていますので、本当はどこにあるのかよくわかりません。

訪ねて行きますと、そういうようなお話が、

昨日のことにように語られる。今そこに牧水がいて、今そこにKさんがいて、互いに書き交わしたことが今である。昔が今であるという、そういう形で語られるのは、思えば感動的な感じがするんです。まあ、沼田市内でも案内してくれる方が「あそこが角藤です。今はここにあつたのが、反対側にいつちやいましてけれど、看板は昔のままだ」とかね。いろいろと、その生方家の、角藤の話をしてくださるわけで。我々も生方記念館で、この生方誠さんがアメリカに五年間行っていた、その形跡をいろいろなところで見せていただきましたけれど、沼田きつての、インテリで文人ぶんじんだったっていうことは、確かだろうと思います。ついにながらに言いますと、生方たつゑの家っていうのは、その文化財になっているんです。沼田の文化財になって、群馬県の文化財（及び、国の文化財）になっているんです。江戸時代みたいな頃の建て方で、何て言うんでしょう。奥おくが、お店があつて、出居でいみたいところがあつて、その奥があつて、その奥があつて、四つくらい奥おくがあるんですね。廊下りやうかじゃなくて、襖ふすまでこう次々に奥へ入って行く。まあ、ぐるっと、廊下を廻る道もあるんですね。そうすると、一番奥っていうのは窓がない。次の部屋も窓がな

い。そして、障子っていうか、厚ぼつたい障子を閉めてしまうと、牢屋みたいなんです。そこでね、生方たつゑが、ああいふ三十年代に前衛的な歌を作っていたっていうことを考えると、何か非常に屈折感っていうものが、その座敷に座つてみるとわかる。江戸時代には、これはどうして窓がなかったかっていうと、従業員の逃亡防止だったっていう噂もあるんですよ。一体いくらで雇っていたんだらう、というのも問題ですけども。逃亡されるのが怖いような給料で雇っていて、窓も入口も、逃げようと思えば全部お店を通らなきゃ、三つくらい部屋を通つて、お店を通らなきゃ逃げられない。そういう一番奥の部屋なんですよ。その他、まあ生方さんの部屋っていうのも、もちろんありまして、それから、日頃その誠さんっていうアメリカ婦りの旦那と住んでいた、ちよつと洒落た部屋も、もちろんあるんです。けれど、生方たつゑが、何でもた、あの人、伊勢の人なんです。伊勢から何でもあそこまで嫁いで来たのか、改めて疑問を持つてね。この疑問が解けると、生方たつゑの歌も少し位が上がるのかも知れないなど思ったりするんですけども。そういうすこい旧家を見せたいだいたりしたわけなんです。

それから、だんだん老神に向つて歩いて行くわけですが、吹割の滝っていう滝があるんです。牧水は、その吹割の滝については、たくさん書いてはいるんですけど。私どもは、その吹割の滝をずーつと滝道に従つて歩いて、すこい滝だなあと思つたので、ちよつとお話します。この滝は上からどーと落ちてくる那智の滝のような滝ではなくて、平らなところで、滝の水の勢いで石が割れる。それで吹割と言つたんじゃないか、と思われちゃう、すこい平らな石がいくらか段になつて続いているところを、水がさーと流れていく。日光の竜頭の滝を大きくしたような、そういう滝なんです。私はとても滝の描写はできませんが、牧水はこんなふうに書いています。

長さ四、五町、幅三町ほど、極めて平滑な川床の岩の上を、初め二、三町が間、辛うじて足の甲を潤す深さで一帯に流れ来た水が或る場所に及んで次第に一方所の岩の窪みに浅い瀬を立てて集り落つる。窪みの深さ二、三間、幅一、二間、その底に落ち集つた川全帯の水は、まるで生糸の大きな束を幾十百振じ集めたように、雪白な中に微かな青みを含んでくるめき流るる事七、八十間、其処でまた急

に底しれぬ淵となつて青み湛えてい
るのである。

ここまで読んで、そのとおりだなあと思つたんですが、この土地の人は「牧水はこんなところ歩きません。あつちの方の高い所から見下ろしたんじゃないですか」なんてことを言っていましたけど、やつぱり歩いていかなあという感じが私にはしました。こんなに詳しく長さや幅や深さや、覗き込んだ深さや、そういうことを見て書いていっているのは、やつぱり歩いたんじゃないかって気がするんです。この滝は怖い滝で、恐ろしい。何かあの死の淵のような深い恐ろしい淵が、牧水の書いたように落ちていって、牧水も結構こは恐ろしいものと思つて過ぎたんじゃないかなあと思いますね。

そのような吹割の滝を通つて、そして老神から牧水の足が向いたのは白根温泉です。そして、そこに鬱蒼たる原生林が生い茂つていて、丸沼に至つた。米川さんは、この間、丸沼までわざわざ別に行つて来たらしいので、後で丸沼の話を書いてみたいなあと思うんですけど、米川さんが見た山の姿っていうのをね。牧水は、こんなふう書いています。

丸沼のへりを離れると路は昨日終日とおく眺めて来た黒木の密林の中に入った。

樅、梅、などすべて針葉樹の巨大なものがはてしなく並び立って茂っているのがある。ことに或る場所では見渡す限り唐檜のみの茂っているとこがであった。この木をも私は初めて見るのであった。

九州には生えていないマツ科の針葉樹なんでしょう、きつとね。このところ、それで過ぎてしまわない。この一緒に行った案内人から「実は、この原生林は一人の山持ちの財産なんだ。一人でこの山を持っているんだ。そして山持ちはこの山全体、つまり松や梅や樅や唐檜が生えている山全部を、東京の製紙工場に売っちゃった」つて言うんですね。そういう話を聞いてびっくりするわけです。つまり製紙工場にいくらで売ったんだ、つていうと、代価は四十五万円。当時の、大正十年代の四十五万円つていたら、ちよつと私にはわからないんですけども。伐採期間が、いっぺんに切っちゃいけない。そりやどつかから、いろいろ大変な文句がくるでしょう。それで伐採期間が四十五年間。一年に一万円ずつ切りなさいつていう契約なんですね。でもあの頃の一万円つてすごいんだと思いますよ。で、そういう話を聞くわけです。それで、売り渡された四十五万円をこの生えている木、一本一本で牧水は割ってみるんですね。計算

もすごかった。私にはとてもできない計算なんです。そうすると、一本いくらになるかというと、一抱えも二抱えもあるような、樹齢もわからない老大木が、平均一本六錢から七錢だつていうんですね。一本六錢から七錢で切られてしまう。そして、その巨大な材木が大金持ちの家の建築材料になったり、あるいは屏風や衝立のようなものになったりするんでしよう。それで牧水は、その二抱えもあるような木を眺めて、涙に似た哀惜の心を樹木に抱いたつて、こういうふうにつていっているんですね。

長い坂を登りはてるとまた一つの大きな着い沼があった。菅沼といつた。

それからまた過ぎて、やや平らかな林の中を通ると、青い草むらから噴きあげる水を見たんです。これが実に菅沼、丸沼、大尻沼の源となる水だつたんですね。そこで、牧水は、それを聞くと私は思わず躍り上つた。それらの沼の水源といえは、とりも直さず

片品川、大利根川の一つの水源でもあらねばならぬのだ。

ばしゃばしゃと私はその中へ踏みこんで行つた。そして切れるように冷たいその水を掬み返し掬み返し幾度となく掌に掬んで、手を洗い顔を洗い、頭を洗い、や

がて腹のふくるるまでに貪り飲んだ。

というんですね。つまりこれが牧水が「みなかみ」を訪ね当てて、そしてようやく、「みなかみ」の水と一体になった時の、儀式的な喜びの表現だつたと思うわけなんですけれど。そういう小さな水がどんどんどん大きくなつていく。そのところを、牧水はよろこんで旅をして来たわけなんです。

この白根温泉での案内人とも、やつぱりお酒を飲むんですけれども。まあいろいろ人が立て込んで、十分いいお酒を飲めなかつただけれど。牧水の旅のいいところは、これは山持ちが全部この山を売つてしまいました。と言われたときに、いくらで売つたのか、そして、すると一本の木はいくらに当たるのか、つていうようなことを訊く。それはお金の計算とか、そういうそのものだけじゃなくて、経済的な意味で訊いているんじゃないんですね。一本の木の値はいくらで計られているのか、木は生きているわけです。生きた一本の木の値段が六錢とか七錢つていうようなお金で。まあ我々昔、お小遣いつていうのは、銭数えで。五錢も持つっていると大変お金持になつたような気がしたものですけれど。その五錢を持つていれば木が一本買えるつていうこと、そういうことを恐ろしいように思うわけ

です。巨大な木の命が一本五銭である。その恐ろしさについていうものを考えていると思います。

それで、それから私たちは、牧水がその時の旅では寄らなかつたんですけれども、必ず猿ヶ京にも行っているはずで、皆さんが今日こういうのをもらいになつていていると思います。「JR東日本小さな旅のリーフレット」。これの十ページに、猿ヶ京のことも書いてありますね。十ページの赤谷湖のところを見ますと、

若山牧水が湯宿温泉に向かう際に昼食をとったのが、今では赤谷湖に沈んだ幻の温泉「笹の湯」。

このあたりに、やつぱり猿ヶ京も、この近くにあつたわけなんです。本当は、持谷さんがいらつしやるので、もう少し詳しく聞いてみれば一番いいですけども。それは夜の方で聞いていただくことにいたしまして……。

持谷さんは、この猿ヶ京で、宿屋のお夕食が終るところから、語り部として猿ヶ京一帯に伝わっている民話を語っていらつしやいます。ですから、猿ヶ京だけでなく、この辺り一帯の北群馬の温泉伝いの、戦後までは秘境と言われた、戦後でも昭和四十年代くらいまでは、本当の秘境であつた、その猿ヶ京、それから

法師、そういう温泉の民話を集めて、それを語っていらつしやる。そこに、小さい子供や立派な大人や何かが集まって、その話をしみますみ聞いている風景を、猿ヶ京に泊つて見ました。つまり我々は何を失つたのかつていうことを、猿ヶ京の語り部の持谷さんのお話から私は感じました。同時に、牧水の旅からも、我々は何を失つたのか、そして何を求めているのかつていうことが感じられて来ると思ふんです。

我々は、その法師、猿ヶ京に泊つた後で暮坂峠に向うわけですが、この暮坂峠の……。

やつぱり(沼津牧水会の人たちも)バスで廻つてらつしやるので、私と同じような体験をしたと思いますが、暮坂峠の坂道に、牧水の歌が何十となく板碑で建っているんですね。十〜二十メートル置きくらいに、牧水の歌碑が建っているのを読み切れないので、バスの窓からずーつと眺めて、「あ！またあつた、またあつた！」なんて言っているわけですが……。

暮坂峠に牧水の像が建っています。これ(沼津牧水会会報「幾山河」第二十五号)の七ページに(載つていますが)、牧水像の下で「牧水まつり」があるんです。私たちが行った時、「段々ここまで来る人がいなくなつて淋しい」と言っていましたので、ぜひまた、沼津牧水

会で行つてくださるといいなと思うんです。

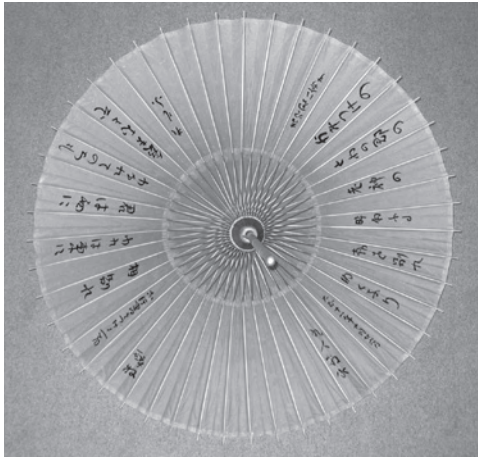
ここに建っている牧水の像つていうのは、二度目の像でありまして、原型の像は中之条町の「歴史と民俗の博物館」の玄関のところ建つていまして、それとこれと、どこが違うかつていうようなことを一所懸命眺めて、触つてみたりしたんですけれど、ちよつとどこが違うのか、あんまりよくわかりませんでした。その時たしかにここが違うつて、ノートしたはずなんですけれど、それがどつかにいつてしまひまして、よくわからなくなつております。

そういうふうに、「牧水の旅」の信念つていうものは、やつぱり生活が、ただ足で歩いた、目で見ただけで触れた、だけじゃなくて、そこに住んでいる人の生活、それから人生、そういうものとの交流を併せて行うことによつて、本当の「牧水の旅」つていうものが完成しているのだつていうことを、この紀行文を讀む都度、いつも感じているのです。

結論は大して変わりはないんですけれども、そのような感動を味わつたことでした。

司会(林 茂樹)

馬場先生、ありがとうございます。(拍手)
先生からご紹介いただいた「みなかみ」への



牧水記念館に展示してある「傘」



舒林寺の牧水歌碑

旅ですが、昨年秋、沼津牧水会のメンバー二十数人、バスツアーで行って参りました。「会報」に載せてあります。ぜひ欲しいという

方がおられたら、残部が多少残っていると思いますので、事務局へ申し付けてください。

ところで、馬場先生のお話に出て参りました「傘」の話ですけれども、実は昭和六十二年十一月一日に牧水記念館はオープンしました。その時に、展示する目玉の一つとして、あの傘をどうしても飾りたいということで。その時には、健在でした「傘」を生方家から拝借して、レプリカにしました。現在、それを牧水記念館に飾っております。先生がおっしゃられるように、「傘」がその後どうなったかというのを、こちらでも知りたいと思っておりますけれども、今どうなっているか。ちょっと、ポロポロに傷んでしまっているなんて話も聞いたこともあるのですが、どこにあるのか、分からなくなってしまうました。私の方も、沼津牧水会としても、どこにあるのかしらと思っております。

ここで、ご都合で遅れて参られました秋田県からお出での石川錬治郎さん、那波さんほかのみなさん、どうぞご起立ください。石川錬治郎さんは、平成十一年に「日本ほろよい学会」を立ち上げた方でございます。(拍手)

「日本ほろよい学会」は、てるおみやぎたか 暉峻康隆先生が名誉会長、伊藤滋先生が会長でした。現在は、

佐佐木幸綱先生が会長で、副会長が石川錬治郎さんです。私は「爛司」の一人です。「爛司」の爛はお爛の爛です。

さて、この後、「女流歌人、牧水を語る」ということで、栗木京子先生、小島ゆかり先生、米川千嘉子先生、三人の女流歌人に、牧水を存分に語っていただくと思います。司会は、伊藤一彦先生にお願いいたしました。

五分ほど休憩させていただきます。三時から始めたいと思います。

馬場あき子先生

歌人、評論家。昭和三年、東京都生れ。昭和女子大学国文科卒。昭和二十二年「まひる野」入会。二十三年から中学、高校教員を勤める。五十三年「かりん」創刊、以後主宰を務める。朝日歌壇選者、日本芸術院会員。歌集に『早笛』『無限花序』『桜花伝承』『晩花』『葡萄唐草』『月華の節』『阿古父』『飛種』『馬場あき子全集』『鶴かへらす』等。評論に『式子内親王』『鬼の研究』『和泉式部』『修羅と艶能の深層美』『歌話の世界』『日本の恋の歌』など多数。現代短歌女流賞、迢空賞、読売文学賞、毎日芸術賞、斎藤茂吉短歌文学賞、現代短歌大賞、日本芸術院賞、紫式部文学賞等を受賞。平成六年紫綬褒章受章。



若山牧水顕彰全国大会

座談会 「女流歌人、牧水を語る」

栗木京子、小島ゆかり、米川千嘉子／司会 伊藤一彦

林 茂樹 ただいまから、「女流歌人、牧水を語る」を開会したいと思います。

では、ご紹介いたします。栗木京子さん、小島ゆかりさん。米川千嘉子さん。それから、司会をしていただく伊藤一彦さん。(拍手)

皆さまについてのご紹介も、先ほどお配りしました資料「本誌の三十六頁下段に記載」に記してありますので、それをもって省略させていただきます。どうぞ、伊藤一彦先生、よろしくお願いいたします。

伊藤一彦 皆さん、こんにちは。宮崎から参りました伊藤一彦です。日向市の若山牧水記念文学館の館長をさせていただいております。私、いろんな名刺を持っていますけれども、名刺を出して皆さんが一番よろこんでくださるのは、「若山牧水記念文学館館長」の名刺ですね。牧水ってすごいなあと思いつつ、いつもその名刺を使わせてもらっています。

今日は「牧水を語る」ということで、現代の日本の短歌界を代表する女性歌人三人。今最も最前線で、いい短歌を書き、いい文章を書

いておられる三人に、牧水を大いに語っていただくということで、私も本当にたのしみです。どんな話が出るかと思っております。

実は、東京駅で四人たまたま一緒になりまして(笑)。たまたまなんです。それで、これは同じ座席で、打合せができていいなあと思つて……。何にも、打ち合わせの話も出ずに、余計な話をずーつとして来ました(笑)。だから、打ち合わせ「なし」です。

お三人には、前もって、牧水を語るのに、八首短歌を選んでいただきましたので、その八首を基にしながらお話ししていただくと思つて。特に、こういう短歌ということは指定しなかったのですけれど、うまい具合に「恋のうた」から始まって、「家族のうた」「旅のうた」「自然のうた」ということで、牧水ワールドがうまく出揃った感じになりました。

その「旅」の中には、先ほど馬場さんのお話くださった世界と重なるものが出て来ると思つて。私個人は、馬場さんのお話を聞

きながら、この夏、同行させてもらいましたので、いろいろ懐かしく思いながら、お話を聴きました。これは、牧水の三十代半ば以降の『みなかみ紀行』のお話ですね。

今日は、この(資料の)順番で行きますと、牧水の若いときの二十代の恋愛の歌から入ることになるんじゃないかと思うんです。一応、皆さんの資料を見ますと、「恋のうた」がありまして、それから「家族のうた」、ここでは特に沼津の、家族時代のことが出て来るんじゃないかと思えます。

三人の紹介は皆さんご存知ですし、プロフィールが出ていますので、自己紹介的なことも含めてお話いただくといいかと思うんです。



「恋のうた」

最初、やっぱり、牧水の出発は、『別離』という、いわば、失恋歌集ですね。私から言うと、恋愛にピリオドを打とうと思って、自ら『別離』と名付けたような気がするんですけども。ご存知の方が多いかと思いますが、園田小枝子という、既に結婚して子供もいた女性と深い恋愛関係になって……。

まあ、詳しい事情は省略いたしますけれども、その恋愛をどういうふうには自分は切り抜けるかということで、苦悶の五年間があるんです。それが、牧水の人生を作ったと思うんですね。後の「旅のうた」にも「酒のうた」にもそれは大きく影響していると思うんですけども。その『別離』という歌集。あるいは、『別離』の前に出された『海の声』『独り歌へる』という歌集。こういう中から「恋のうた」を選んでいたと思いますので、きつと、後の「旅のうた」「酒のうた」「人生のうた」に繋がるような想いが、ここで養われたんじゃないかと思うんです。

私個人は、特にこの美しい女性三人が、牧水の恋を、男・牧水をどう語るか、どう斬られるか、非常に関心があります。牧水さんが、きつと、草葉の陰で「私のことを、ああ

言っている」と思いながら、今日はどっか沼津に御霊みたまが降りて来ているんじゃないか思っているんですね。

最初は、五分前後でいいでしょうかね。「恋のうた」をみんな取り上げていただきましたので。

この(資料の)順番は、一応、「あいうえお」順になっていますか。

栗木京子 「年の順(笑)……」。

伊藤一彦 「あいうえお順」だそうです(笑)。

じゃあ栗木さん、何か一言でも、自己紹介、あるいは牧水についてちょっと出合いという話があったら、それもおっしゃっていただきたい。「恋のうた」についてお話ください。よろしくお願ひします。

栗木京子 こんにちは。栗木京子でございます。私は第八回の若山牧水賞を受賞させていただきました。それでこうぐつと牧水という歌人が近くなったという縁があります。「夏のうしろ」という歌集で受賞したんですけども、その時に、選考委員でおられた佐木幸綱先生が、「この歌集には確かにいい歌も多いいけれども、酒の歌が少ないのは、非常に残念だ」と(笑)。あの歌集には、多分酒の歌は一首もなかったんですね。元々、私は本当に残念なことに、アルコールに弱い体質で、



お酒はほとんど飲めないのです、したがって、「お酒のうた」というのをほとんど作ったことがない。まあ、そういう私が牧水のことを語るというのは、大変申し訳ないのですけれども、一人のファンとして、今日は、参加させていただきます。

牧水の短歌^{うた}って、内容の素晴らしさももちろんですけど、調べがね、本当に魅力的なんですね。特に「恋のうた」というのは、内容でどうこう、理詰めでどうこう口説こうとかというよりも、何となくリズムの麗しきで酔わせてしまうというところがあって。

一番と二番、最初に引きました「恋のうた」の二首ですね。

山を見よ山に日は照る海を見よ海に日は照るいぎ唇^{くちべ}を君

『海の声』という第一歌集の歌で、これは先ほど、伊藤さんがおっしゃった園田小枝子さんとの恋が成就して、これは、房総の方の根本海岸ですか、そこで、二人で愛を確かめ合うときの恋の絶頂の中で詠んだ歌なんです。次の歌もそうなんですけれどね。

短かりし一夜^{ひとよ}なりしか長かりし一夜なり
しか先づ君よいへ

二人で一夜^{いちや}を共にする。共寝をした後に、君にとつて、あつという間の一夜^{ひとよ}だったのか、それとも、いつまでもつづくような長い一夜だったのか、先ず、あなたから言いなさい、という、こういう牧水の短歌^{うた}って、対句とかリフレインですね。命令形っていうのも多いですね。そこで何か調べの中で、右へ左へと揺れながら、何となく催眠術にかかったような感じで。最終的には、「いぎ唇を君と言われると、「はい」と言つて、眼をつぶつてしまふみたいな(笑)。ちょっとずるいみたいなところがあるんですけれど。私はね、「恋のうた」ってね、それが最高の「恋のうた」じゃないかと思うんですね。

預金通帳を見せられて、「私はこれだけの資産があります。将来はこういうふうです」って、人生設計^{としけい}を滔々^{たうたう}と語つて口説かれても、

多分なびく人は……。まあ、少しはいるかも知れないけれど、大抵の女心はなびかない。

何だか分からないけれども、大きく出ているわけですね。「山を見よ」「海を見よ」って何かものすごくべらぼうに大きなところから入つて。だから「右を見よ、左を見よ」とかね、「僕の眼を見よ」とか、何とか言われたら、ちよつと嘘臭^{うそくさ}いですけれど。これだけ大きく言われちゃうと、かえつて誠実味を感じるかなあつていうふうに思いますし。

二首目の歌なんかもね、リルケの有名な詩で「愛」という詩があつて。皆さんも冒頭の部分よくお聞きになったかと思うんですけど、

愛は、どんな風^{かぜ}にして君に來たのか？

それは照る日のように、花ふぶきのよう
に來たのか？

それとも 一つの祈りのように來たのか？
——話したまえ。(片山敏彦^{ひやま としひこ}訳)

という詩があつて、何かそれに似ているなあつていう感じがするんですね。いろんな例を挙げながら、こうだったのか、ああだったのか、それともこうだったのか、まず、語りなさい、というふうな。だから、リルケというのは、ドイツの詩人ですけど、牧水より十歳くらい歳が若いかな。ちよつと分からない。

ひよつとしたら、リルケの影響なども受けているのかなあ。森鷗外などが明治になって盛んに翻訳して、日本に紹介していますし。あの、カール・ブッセの詩などはね、よく言われる、あの

幾山河越え去り行かば寂しさのはてなむ
国ぞけふも旅行く

というのは、カール・ブッセの「山のあなたの空遠く幸い住むと人の言う」という、あれの影響を受けているんじゃないか、というふうに言われておりますけども。英文科で学んでいまずからね、牧水は。そういう影響もあるのかなあっていうふうに思ったりします。

これ、二十二歳のときの非常に若い、第一歌集の中の歌なんですけれど。

天性の恋愛体質(笑)。口説きの天才だなあというふうで。私は好きですね。

米川さんはね、ご主人が理科系の坂井(修一)さんなので、こういう歌にはよろつと行かないと思うんですけれども(笑)。私は好きですね。

伊藤一彦 口説きの天才か、なるほどね。この二首見ただけでも、栗木さんが言われたように、四句まで来て、「いざ唇を君」ね。そして二首目もね、四句まで来て、「先づ君よい

へ」つてね。両方とも結句に「君」が出てくるんですよね。

牧水は万葉集を勉強していたので、二句切れ、四句切れの五七調の歌が多いんですね。四句で歌が切れるわけですね。四句で切れた後、何が出て来るかっていうのが非常に重要なんですけれど。この場合は、二首とも「いざ唇を君」「先づ君よいへ」。まさに口説きですね。なるほどなあ、と違って聞きました。

牧水は、日向の山と海を愛しながら育ちました。沼津に来たのも、沼津の山と海を愛しているんですよ。常に山と海が牧水の中で、いつもこう大きな存在としてあるんで、その意味で一首目、牧水の代表の「恋のうた」なんですよ。

山に日が照るように、海に日が照るように、自分はお前に口づけするんだっていう、何か、そういうスケールの大きな歌ですよ。

調べの問題を、栗木さんに言っていたので。それは、ほかの歌にも通じる。どこからそういう調べのよい歌が生まれたのか。また、ご議論をいただけるといいなあと思いますよ。

つづいて、小島さんの「恋のうた」三首ありますね。どうぞご自分の紹介も。よかったです。お願いします。

小島ゆかり はい、小島ゆかりです。よろしくお願いします。

私も若山牧水賞をいただいたことに始まって、牧水の人と歌に非常に親しくなったのが、全国の牧水を愛する皆さんとの距離が縮まったなあ、と。これが一番うれしいことだなあと思うんですね。まあ、数えたら切りがないですけど。今日もご紹介のあった岡山県の哲西町の皆さま。それから、宮崎の東郷町の皆さま。日向市の皆さま。それからもちろん、沼津の地元の皆さま。それに加えて数年前には、裾野市の牧水の顕彰大会にも行っ参りました。各地で非常に牧水を熱く支持する気持ちも伝わって。今日、ここに、私を呼んでいただいたことも大変うれしいことだなあと思います。

「恋のうた」なんですけど、牧水の「恋のうた」を読んでいて、大きく分けて、三つぐらいのことを感じました。それをそれぞれ一首ずつ代表的な感じで選んだんですが。

一つは「普遍性」っていうんですかね。時代を超えてまた特に誰ということなく愛唱できるし、また、それぞれ読んだ人が自分の歌として愛せるような、そんな……。もちろん、リズムも含めてですけどもね。たとえば、一首目の、「海の声」からですが、



海見ても雲あふぎてもあはれわがおもひ
はかへる同じ樹蔭こかげに

これは、牧水が大学時代に郷里へ帰る。その少し前に、どうもさつき伊藤さんがおっしゃった園田小枝子さんという人とデートをしているんですね、旅立つ前にね。そのことを友人にハガキでちらっとほのめかしている。そして、美人ではないよ、別に恋じやないよ、と書いているんですね。で、伊藤さん、さすがだね、「こう書いているからには恋だろう」とつて言うんですけれど(笑)。面白いですよね。牧水に限らず、啄木もそうだし、意外にあの時代の人つていうのは、ちよつとデートしたり、ちよつと何かすると、すぐ人に手紙を書くんですよ(笑)。ハガキとか。何かすると、すぐ友だちにこうだこうだというふう

に書いて。どうなんですかね、今、若い人はメールなんかでそういうことを友だちと共有するのもかも知れないですけども。私たちはあんまりそういうことはしなかったですよ、ひっそりと(笑)。一人で、ひっそりと思いつながら恋が相当進行して、何か悩んだり、失恋したりしたときには、お友だちに話すこともありましたけれど。まあ、テレビがないとか、メールがないとか、そういうこともあるんでしようけれど。やたらに、いろんな人の書簡が残っていて、そこに誰々と会ったよ、こんな人だったよ、とか。こういう理由でここへ行ったよ、というのを大変小まめに、筆まめに、人に知らせているんですね。そのおかげで、私たちは作品の背景が随分とわかると思いますね。ですから、たとえば、栗木さんと伊藤さんがどこかでデートをなさったとしても、今はメールで、消去しちゃうから、その証拠が何処にも残らないということになりますすけれども(笑)。

最初の歌、「同じ樹蔭こかげに」。ここはですよ。ここは、たまたまその小枝子さんとデートした時に、どこかの樹蔭、これが思い出に残つて、こういう歌があるんですが。自分がたとえ海を見ても、旅先で海を見ても、雲を仰いで、思いがいつもそこに帰るのは、誰にでもやっぱりあることで。「おもひはかへる同じ茶房に」とか、「おもひはかへる同じキャンパスに」とか、「おもひはかへる同じ沼津駅に」とかね。いろんな「おもひ」が共有できる。そして、このリズムを大変・・・、なんていうのかな、胸にスーッと入って来るので、とてもいい歌だなあと思いました。

それから、もう一つ思ったのは、その共有できるような変遷のある歌と、もう一つ大変独創的な発想の歌があるんですね。その代表として、二首目を引いて来ます。

君かりにかのわだつみに思はれて言ひよ
られなばいかにしまふ

先ほど栗木さんがおっしゃった、根本海岸での連作の中の一首だったと記憶しておりますが、小枝子さんが海を見ながら、ちよつと無口になったんですね。それでどうも牧水心配になって来て、彼女、無口になって来たから、何か海に惚れ惚れとしちゃって、海に獲とられちゃうんじゃないか、というふうなことで。もし君を、もしこの海に想われて、言い寄られたりしたらどうするの、つていうふうな。普通こんなことは考えないと思うんですね。彼女を送っていく夜の道で、いくら月が美しくてもね、あいつはライバルだつてい

うふうには、あまり普通は思わないから。その感覚が大変牧水的だと思っただけです。また、この後、自然の話が出てくると思うんですが、おそらく、沼津に転居した前後あたりから、牧水は大変いい旅をしていますし、また、自然に対する見方というのが、ゆるやかに変化しているなあということ、散文などを読むと、とても感じます。それは、そのあたりから、チラッと牧水自身も書いていますが、自然の中に自分をなるべく小さくして入って行くんだというような姿勢がありますね。それに対して、若い頃の歌、とりわけ恋愛の歌に見える自然というのは、どちらかというと自分の気持とか、自分の体の方に自然を引き寄せてくる。自分が後々逆らって入って行くのよりは、もつと自分の方へ自然を引き寄せてくる。そして、まあ一体化までは行かないけれども、自然と自分というものが一つ、同じ対等みたいな立場でね、その存在を捉えられていることが多いなあと思うんですね。これも、海も自分のライバルになるっていうのは、すごいなあと思うんですね。で、栗木さんは非常に大きく大きく言われると、つい眼をつぶって口づけをしてしまうって言っていましたけれど、私はあまりテンションが高いとちょっと引いてしまってます。

ちらかというところ、あまり人が言わないような、ちよつと子供っぽいような、そんな少年性みたいなものを見せられると、もしかしたら目をつぶっちゃうかも知れないな、と思うんですが(笑)。この歌は大変好きな歌であります。

それから、三首目の『別離』からの歌。これは三つ目の自然ということなんですが、自分の気持とか、自分の心理の変化っていうのを大変自然と共有するんですね。自然と自分というものが心理の面でも随分一つのものになっているという気がします。まあ、自然をとおして自分の心理を見張るとか、自分の心理を自然の中にも見てしまおうとか、そういうことだと思っただけですが、

ことごとく落葉おちばしはてし大木たいぼくにこよひ初
めて風のきこゆる

いい歌ですね。小枝子さんとの恋が本当に行き詰って別れる。別れなければいけないと、悩んで悩んで悩んで、お酒をいっぱい飲んでしまふ……。ところが、伊藤さんがお書きになっているから、皆さんご存知だと思うんですが、もう別れる気持になっている時に、小枝子さんが妊娠をしているということがわかる。その、それからの苦悩というのが、おそらく、ただ恋愛を断ち切らねばいけないと

いうよりは、もつともつと何か現実的な苦いものが牧水の中にあつたと思っただけです。その頃の歌です。

「ことごとく落葉はたきしはてし大木らぼくに」で。この落葉して、裸木はだきに、裸木らぼくになつた大木ですね、その大木に「こよひ初めて風のきこゆる」。これは伊藤さんの鑑賞論文に、私、はつとしました。ふたつの鑑賞の仕方があるというので。一つは、その大木に吹く風がある。裸木になつた、その風に吹かれる音が今宵はじめて大変にしみじみと、あるいは、忽々そうそうとした感じで聞かれる、という鑑賞が一つですね。もう一つは、もしかしたら大木自身が葉を落としてしまったことで、大木自身が、自分で、ありありとしみじみと風の音を聞いたんじゃないかなあという鑑賞ですね。この二つがあるだろうという伊藤さんの文章を読んで、ああそうかと。そうすると、いよいよ牧水と自然というものが興味深い結びつきをしてくるなあ、と。そんな牧水の「恋のうた」で、三つ目の特徴があるなあと思つた中の例として、三首目を引いてみました。

伊藤一彦 はい、ありがとうございます。そうですね、栗木さんの「山を見よ山に日は照る」の歌は、わりと自然とぴつたり一体化した歌ですね。小鳥さんの引かれたのは、海

を見て、雲を仰いでも、海や雲でなくて、想いは君と一緒に過ごした樹蔭に行くという点では、ちよつとこう、自然よりも、今は彼女なんだという、そういう詠い方で。これはこれで、また牧水の特徴でしょうかね。その次のこの歌。この歌はね、米川さんも引いておられるから、ぜひまた話してもらおうと思ふんですが。

僕は「わだつみ」っていうのは、海、あるいは海の神じゃないですか。小島さんがおっしゃったように、一所懸命彼女は海を見ている。ものを言わないでいる。その時、「わだつみ」が言い寄って来たら、お前は私を選ぶか、「わだつみ」を選ぶかっていう、これは、どれくらい本気でそう思っていたんだろう。いや、単なるこれ文学的なレトリック。短歌の表現上そういう表現をしたのか、それとも相当本気でね「わだつみ」に嫉妬して・・・。「さらわれよきや」と、どうでしょう。これは米川さんにぜひ聞こうと。

米川千嘉子 やはり本気だと思ふんですね。この歌の前に、小枝子さんが無口になったから、心配になって、なんか海の方に気が行っちゃっているから。

伊藤一彦 そう、「海をみるな」という歌があります。じゃあ、相当本気で「わだつみ」の神

にね、彼女を奪われるんじゃないかと思つていたんですね。そうするとこれはね、やつぱりね、相当に古い感覚。日本人が元々持つていた、自然の中にアニマ、靈魂を感じる考え方が、牧水の中に来ていたってことですね。

僕らは、今これ、文学的レトリックで。あ、なかなかうまくいこと言つたな、自分の彼女に対する愛を、と思うけれど、ひよつとしたらね、相当本気で海の神が現れて、彼女をさらって行つたらどうしようというのがね。それを今から、ちよつと米川さんに聞いてみようと思つていますけれども(笑)。いやあ、こういう、これくらい愛し合つたということなのかなあと思つてですね。

先ほど栗木さんも小島さんでもしたけど、若山牧水賞、みんな受賞したんです。牧水賞は、ここにおられる馬場さん、佐佐木さん、前は大岡信さん、それから岡野弘彦さんが選考委員で、一年間で最も優れた歌集を選ぶというところで。だいたい、四十代から六十代くらいが一番油の乗つた年齢の方の仕事を顕彰するということから始めて、第四回までは、ずつと男性ばかりだったんですね。で、第五回、小島さんが受賞して以来、次々と女性歌人が受賞しまして。牧水賞を受賞すると、牧水について宮崎で講演をしなくちゃいけない。

新聞に連載、牧水論文の連載を書くとかのノルマが課せられるんですね。それが最初からの狙いで、ぜひ現代の代表的な歌人に、牧水をぜひ読んでもらおうということで。おかげで、牧水に関心を持つてもらえましてね。(副賞の)百万円をただではやらないぞ!と(笑)。百万円やるからには、牧水を読んで、講演をしてもらおうということです。今年は大口玲子さん。仙台から宮崎に移り住んでいる大口さんの『トリサンナイタ』というのに決まつたんです。米川さんも若山牧水賞を受賞しているんです。よろしくお願いします。

米川千嘉子 はい、若山牧水賞の受賞者で、牧水伝道師になりました(笑)。というか、なるという感じですが。私は牧水賞を七年くらい前にいただいたんですけど、その後の講演で、喜志子さんの話をしました。

その時には、小枝子さんとの熱烈な恋愛があつて、結婚した後も、やつぱりそのことについていうのは、かなり深い傷になつていたつていうことで。喜志子の側から見ると、そのことがちよつと辛かつたかなという感じで、自然と、牧水の恋愛についても、批判的な感じをちよつと述べたんです。こんな、なよなよとした女にそんなに深くあれして、いやだなあつて。私は喜志子さんの性質が好きだから



なあと、いろいろ思ったんですけど。やっぱり、私もだんだん中年に長けて参りますと、男の人に対する、あの限りなく、寛容になってくる(笑)。そんな感じになって。そうすると、改めて読むと、その何ていうんでしょう、牧水の「恋のうた」のよさっていうか、芯にあった優しさっていうのが、非常にしみじみと伝わるっていうか、感じられるようになって。そういう意味で、後半の一首は挙げたんですけども。一番最初の歌は、小島さんが挙げられたのと同じなんです。

君かりにかのわだつみに思はれて言ひよ
られなばいかにしたまふ

という歌で。あの、日本の神話的な「海」、「わだつみ」というものと、それからギリシア神話とか、そういった西洋の文学の「海」のイメ

ージってのも多少あるのかなあと思ってたんですが。何か今、私たちが見ると「海」と「恋人」ってのは、海はあくまでも背景なわけなんですけれども。この場合には、牧水がいて、恋人がいて、そしてもう一人、「巨大な海」という人がいて。その三者が拮抗している感じがものすごいなあと思ってますね。与謝野鉄幹とか晶子とか、まあ、あの時代の浪漫系の歌人なんかは、すごく大きな舞台装置で、大げさに詠うっていうことは、たくさんしていたわけなんですけれども。この歌は、やっぱりその「大げさ」というのはあるんだけれども、「大げさ」というのとまた違うんですね。そして、あの「海」という巨大な塊があつて、そこに小さな恋人二人がいるんだけれども、その大と小がものすごいコントラストを持つことによつて、その大きさによつて、小さい二人が限りなく、何ていうのかな、充填されていくっていうか、充実していくっていうか、濃厚になっていく。そういう気配がものすごいなあと感じですね。だから、単なる大げさな見立てっていうんじゃないくて、大きい海を自分のライバルであり、恋人を、あるいは獲っていくものかもしれないという感覚するところで、牧水がいよいよ高揚していくっていうか、そういうのがとてもおもしろ

いですね。これは、まあ一つの見立てでもあ
ると思うんですが。

二番目の歌は、やはりまた見立て的なものがあつて、このあたりに牧水の愛嬌っていうのか、そういうものを私は感じて、二首目の歌を挙げたんですね。

十五夜の月は生絹の被衣して男をみな
の寝し国をゆく

これ、栗木さんが先に挙げられた「短かりし一夜なりしか」の歌の近くにある歌で、これ、あの共寝ですよ。ともに過ごしている時の心地よさっていうのを見立てていて、「男をみな寝し国」というのは、もちろん、まあみんな寝ているわけなんだけれども、私と小枝子も共に寝ているっていう、そういう安らかな気持ちっていうんですかね。それが、万葉の月にもどこか繋がるような大きさの中で詠われているんだけど。ただ、月が出て、私たち二人が寝ているよつていうのではなくて、十五夜の月が霏をわあーと、こう引きずるようにして、あるいは、雲を連れるようにして、空を旅している感じがあるんですね。この高貴な女の人が出出するときに、衣をかついで、掛けて顔を隠して、歩いたわけなんですけれども。そういうふうな十五夜の月も空を

ずーっといつているような、というところに、何となく人間くさい感じがあつて、それが自分の満ち足りた感じと響きあっている。近代の「恋のうた」つて、結構たくさんあるんだけど、こういう心地よさを詠うことは、すごく拙つたなかつたことが多いような気がする。こういう気持がいいつていう「恋のうた」は、考えてみると、すごく珍しいんじゃないかなと思いますね。それから三首目は、

わが妻よわがさびしきは青のいろ君がも
てるは黄朽葉きくちばならむ

これはもう、恋愛、いろいろ相手のことがちよつとおかしいぞ、お互いうまくいかないぞ、と思いはじめた歌なんです。これちよつと見ると、「妻よ」つて書いてあるから、奥さんのことかと思うんだけど、そうではなくて。牧水の方は、もう恋人が妻だということ、独り決ひとめをして、家を借りてたりもしたんですね。そういうふうな中で呼びかけている。「わが妻よ」つて呼びかけているだけども。私の持っているさびしきは青で、あなたの持っているさびしきは黄朽葉、あの朽ちた黄色っぽい枯葉のような色だつていうことで。二人が違うなあいうことを詠つていて。「わが妻よ」つてひとりで決めて

ことも、おばさんになって、二十三歳位の青年の心を見ると、なんか切ないつていう感じもあるんですが笑。なんか同時にね、女の人に対して、この時代に、「私のさびしきは青で、君のさびしきは黄朽葉だよ」つていう「君のさびしき」まで思つてくれた青年歌人がどれだけいたのかつていうことを思う。啄木も白秋も、多分恋人の寂しさについては、無関心だったんじゃないかという感じがして。牧水の情熱の歌つていうのは、もちろん「恋のうた」でも情熱的なんだけれども、その背後にあつた女の人のやさしさが、ひとりの人間として見るつていう目が、この三首のどこにもあるんじゃないかな。そんなことを思つて三首を選びました。

伊藤一彦 牧水さんが聞いていたら、よろこびそうな笑。「そうだ、俺はやさしかったんだ。彼女の気持ちがあつてたんだ」と言いそうな感じですね。本当に結婚してないのに、「わが妻よ」つてね。本当に妻にするつもりでね。まあ、いろんな事情で結婚できませんでしたがね。本気で結婚するつもりで、貧しい中で家を構えて、彼女が来るのを待つていたけれども、彼女が来てくれない。実は、彼女はもう既に結婚して、牧水は長くそのことを知らなかったもの

だから、なぜ彼女が自分のところに来てくれないのか、悶々もんもんとするわけですよ。米川さんの引かれた

十五夜の月は生絹きぎぬの被衣かっぎして男をみな
寝し国をゆく

これ、ちよつとね、今、米川さん、なかなかおもしろかつたですね。小島さん、栗木さん、どうですか、こういう歌。ちよつとね、まあ愛嬌のある歌だと米川さんおっしゃつたんですけれど。どうですか、小島さん、栗木さん。こんな歌、どうぞよかつたら。

小島ゆかり 今、おっしゃつてくださつてね。ああ、そういうふうになんて歌なんだなあ。最初ちよつと分りにくかつたんですよ。歌の意味がね。ですけど、歌の配列をみると、明らかに「男女をみなの寝し」というのは、自分たちの共寝であることはわかるので、やっぱり、うれしさをいろんな形で表現して、こういう歌にもなつたんじゃないかなあと思つたんですね。おもしろいですよね。源氏物語の中の歌みたく。**栗木京子** 私もなんか源氏の、よく忍んで行つたりするじゃないですか。「花宴はなのえん」とかね。ああいう。何かそういう忍び歩きたいな感じも・・・。やっぱり王朝文学にもかなり造詣が深かつたのかなという、いろんな知識が

あまり生なかたちじゃなくて、自分流にこなしながら詠っているという。先ほど、まあ外国文学の話もしましたけれども。何か学識をあまりブッキッシュに出さずに、下敷きにながら詠うという、その点では、牧水は優れていたなと思いますね。

伊藤一彦 確かに牧水はいろんな勉強をしたんですけど、あんまり勉強した中身については、披露しないですよ。万葉集を読んだって、万葉集の歌についてどれだけ書いてあるかっていうと、ほとんど書いていないんですよ。でも、愛読したという、ここ沼津の記念館に、牧水が愛読した万葉集がありますけれども。だから本当に読んだ、読んだと言っているけれど、じゃあ、人麻呂の歌についてどう思うのかっていうと、ほとんど書いていない。わずかな文章しかない。だから、自分の中で消化することが第一で、茂吉のようにそれで大論文を書くとかね、そういう野心は全然ないですよ。それも牧水らしいなあと思いますけれど。この「十五夜の月は生絹の被衣して」、これ、結構ユーモアを感じますよね。そういうふうに思いますけれど、でも、その牧水の恋は、五年間でピリオドが打たれて、そして牧水は、新しく人生を切り開くために、喜志子にプロポーズして。これ

も二回目でプロポーズですよ。太田水穂の家で一回会っただけで、その時、多分心に決めていたんでしょうかね。翌年、喜志子のところに行つて、長野に行つて、塩尻に行つて、プロポーズして。喜志子も偉いですよね。もうそれで、散々前の女との恋の話を聞いた上で、結婚に同意するというね。それは、牧水にとつて本当に幸せで、その後の人生、決めたと思うんですけれどね。で、東京での生活、それから三浦半島での生活がありますけれども、大正九年からの八年間、この沼津で、妻と四人の子供に恵まれて。実にいい生活をするわけで。いい生活っていうのは、精神的に安定した仕事をするわけで。そういう「家族のうた」をぜひ、と思つて……。

順番は、いいですかね、今の順番で。じゃあ、栗木さん。僕は「家族のうた」を、と言つたわけではないんですが、みなさん「家族のうた」を引かれてね。牧水の「家族のうた」つてね、あんまり言われないうすよね。酒と旅の歌人ですよ。何か、年中酒飲んでいて、放浪しているようなイメージに言われるんですよ。実は、妻を愛し、四人の子供を愛し、常に家族を気に掛けていたというのも牧水の大事なイメージで、ここが非常にうれしかったですよ。

「家族のうた」

栗木京子 牧水には、四人の子供、男二人、女二人いますけれども、大変子煩悩でね、いい「家族のうた」をたくさん残していますね。私が引用した一首目

着換すと吾子を裸体に朝床に立たせてし
ばし撫で讃ふるも

というね。「朝の歌」という歌集。これは、大正五年に出た第九歌集なんですけれども、三十歳ごろの歌だと思います。ですから、この「吾子」というのは、大正二年に生まれた長男の旅人さんだと思っんです。今日お越しなっている若山聚一さんと榎本篁子さんのお父さまです。(この歌の)その直前に、ご長女が生まれているのかなと思っんです。朝の床に立たせるくらいだと結構大きくなつていまして、その子供の着換えも、牧水が妻に代わつてやるが多かつたんでしょうね。で、裸にして、朝の床に立たせて、「撫で讃ふるも」つていいですよ。何か「元氣だ、元氣だ」とか言いながら、「大きくなつたなあ」つて撫でながら、ほめちぎっている。先ほど、馬場先生のお話で、「みなかみ」へ行つた時に、若い二十代のM君とか、もう一人、二十歳前



喜志子（昭和3年2月1日）

後かな、若い男の子と一緒にずーっと温泉へ行って、若者が旺盛に食べ、かつ飲み、そして一緒に風呂に入ったりして、その若い肉体を見て、自分も元気になっていくというお話がありましたけれども。多分、これも牧水が、特に男の子ですから。すくすく育っていく、その自分の子供を見ながら一緒にやることの中でいく。動詞が多いんですけれども、一首の中に。動詞に愛情がこもっているなあと、いうふうな思つて。どちらかというところ、牧水は名詞とか動詞でつぶつぶと詠っていくというタイプではなくて、何となく、さつきも言ったように、リフレインとか、形容詞の、非常にある意味位置付けた形容詞なんです。哀しいとか寂しいとかね。そういう形容詞で語らせていくというタイプの歌人なんですけれども。この歌は、かえって、その細かく

動詞で言ったところが、小さくならず、逆に豊かになっている。そういう一首だと思えます。それから、もう一首は『黒松』。これは遺歌集になりました。最後の歌集です。大正十二年から昭和三年までの。昭和三年に亡くなっていますので、亡くなるまでの歌が入っているんです。

肌（よ）にややかなしきさびの見えそめぬ四人の子の母のはしきわが妻

というね。これは喜志子さんのこと。だから、この当方で喜志子さんは三十代。三十五か三十六歳。まだ充分にね、若くて、きりつとして美しい方ですよ、お写真を見ますと。

肌（よ）に「かなしきさび」の見える、この「さび」は金属が錆びつく錆（さび）じゃなくて（笑）。まあ漢字で表わせば、「寂しい」という字ですかね。あの「侘び」「寂び」の「寂び」みたいな感じ。ちょっとこう翳（かげ）りある、臍（へら）長（なが）けた趣（おもむき）みたいな。まあ、当時は今と違って、三十代半ばというところ、ちょっと何て言うんですかね、年増（としまわ）女（むすめ）って言ったら変ですけど、ちょっと大人の女性みたいなね、そういうものが色っぽさとして、そういう翳（かげ）りが見え始める。で、四人の子供を生み育てて、忙しいけれども、「はしき」てのは、「愛（は）しげやし」。美しい、素晴らしい私

の妻であるよ、というふうな歌で。こんな歌をもらったら、うれしいですよ。「ややかなしきさび」ですからね。完全に錆びついたわけじゃない（笑）。やっぱりこういうところがね、サービズ精神があるなあと思つて。小島さんも引いていますけれど。小島さんの解釈はまた違うのかも知れないけれども、いいなあと思いました。とつてつけるんじゃないかと、本当に先ほども出ましたけれども、米川さんもおっしゃっていたけれど、相手の気持になつて、恋にしても、哀しみにしても詠えるという人。最後までそういう男性だったんだなあって思わせる歌だと思えます。

伊藤一彦 この子供を着換えさせている歌っていうのは本当にね。朝の光の中で、子供と父親が何か美しく輝いているなあと思っていますね。こういうまったく普段の何気ない日常の「コマをしみじみと詠っている。牧水の歌の特色だと思つてですね。等身大の自分、家族が出てくるっていうふうなんでしょうか。『しばし撫で讀（た）ぶるも』って、まあ本当によくぬけぬけと自分と子供を詠っているもんだと思うかも知れないですけど。牧水は実感だろうと思つてですね。そしていい歌だなあと思つてですね。次の喜志子を詠った歌は、結構素晴らしいですけれどね。これは、あとまた引い

て来られるので、小島さんに触れてもらって。小島さん、つづいてお願いします。

小島ゆかり はい。八首という限定があったので、私は「家族のうた」は一首なんですけど、何も打ち合せしないのに、栗木さんと同じこの歌を選んだというので。あの、牧水顕彰会の皆さま、ぜひとも、この歌を全国に歌碑として欲しいなあと思うんですね(笑)。

「肌をややかなしきさびの見えそめぬ」。栗木さんが鑑賞されたとおりなんですが、私、この「さび」ってどういう漢字かなあと思って、わざわざ喜志子さんの年齢まで調べたんですね。三十六歳ということなのでね。ああ、まだ若いんじゃないかなあと思って。まあ、米川さんは少しお若いんですねども。

こっち側は(喜志子さんのその当時の年齢より)二十年も経っているので、「さび」どころか、何ていうのか、いたく取り返しのつかない何か、こびりつきがあるんじゃないかなあと思うんですね(笑)。しかし、「四人子の」っていうお子さんの人数が歌に出てるっていうことも、この歌の大きな特徴だと思うんですね。ただ母になった妻よっていうんじゃない、四人育てるっていう、四人の子の母であるという現実、やはり大変なものであったと思いますし。ただでさえ、牧水は留

守がちであって、そして生活費もなかなかまかならない中での、四人の子供を育てる生活ですからね。そう思うと、この四人っていうのは、重要な言葉だと思うんですね。米川さんがおっしゃったように、思いやりっていうんですかね。普通もう結婚してね、かなり年数が経っていますから、男性は奥さんの顔ってあんまり見てないんじゃないかなあと思うんですけども(笑)。たとえ「さび」であって見えていて、しかも「やや」とかね、そんなふうに言っただけで詠っている。元々、そういう調子のいいことばかり言う人ならば別ですけど、牧水の家族の歌を読んでいると、子供の歌もそうですけど、子供も可愛い可愛いつて言っている歌もあるかと思うと、一方で、泣いている時には、どうも。膝に乗っている時には、自分も・・・ああ、米川さんの選んだ歌。二十七ページ上段に記載」

ただ泣いている時は、自分のことを思えばいいよ、と正直なんです。日々の中の自分をつくらなくて、その時その時のとても正直な気持ちを詠っている。そういう牧水だからこそ、「はしきわが妻」っていうのにも、何とも言えない情感が感じられるなあと思うんです。この近くにありますがね。旅先で人妻を見たら、「人妻のはしきを見ればときめきて

おもひは走る留守居する妻へ」というのがあって。旅先でね、旅をしている時に、ちょっと色っぽいような、ちょっと素敵な他所の妻をみたら、心は留守番をしている奥さんに走って行くってね。あれは素晴らしい人ですね(笑)。

牧水は、多分女性には非常に好かれるんじゃないかなあと思います。それは、うわべだけではなくて、家族とか人間関係を大変大事にする。先ほどの旅先の出会ひもそうですし、いろんな出会いを、とても大事にする人ですよ。

『みなかみ紀行』の旅は、たしか大正十一年ですよ。その前に一度、大正七年ぐらいに利根川源流に行く旅を試みていて、出発が遅れて、源流まで行けなかったんですね。その時のことをちよつといろいろ読んでみると、面白くって。旅に行こうと思うと、お金がない。まあ、費用がない。どうしようかどうしようかと言っていたら、臨時の原稿料か何かが入って来て、「よし、これで行く」と思っていたら、何か雑誌のことで差し障りが出たり、自分の体調が悪くなったりあるいは、印刷所の人か風邪をひいたりして、そんなことが一段落して、「よし行こう」ってなったら、家に預っていた姪御さんが、

喜志子さんから姪御さんが泣いていると。何で泣いているのか、宮崎から預かっているんだけど、寂しくて、もう寂しくて泣いている。一度、家に帰してあげたらどうかかっていう風なね、優しいご夫婦で。で、帰してあげるためにはお金がいる、旅費がいる。で、その本当に大事な大事なはずのお金を、喜志子さんは、その前に臨時収入があるんだったら、子供にも一枚そろそろ着物を買ってやりたい、あなたも新調したいと言うんですけどね。そんなのも全て「なし」にして、姪御さんにお金を持たせて故郷へ帰してあげるんですよね。こんなところをみると、本当に有り余っているお金ならいざ知らず、なけなしのお金を、そういう、しかもご夫妻で心をひとつにして、姪御さんのために出してあげる。そんなことも考えると、いかに牧水、また喜志子さんが、自分に縁のある人、また何らかの形で、自分とその時々に関わって来た人々、とても大事にしているんだなあとということがよくわかります。で、その思い遣りの致し方っていうんですか、それが折々の歌に感じられるんだなあとと思います。

これは、たまたま妻への愛情ですけども、牧水の根っこにあるものは、やっぱり妻に対しても、子供に対しても、縁のある人たち、



家族と共に（昭和3年7月27日）

牧水、長女岬子、次女真木子、長男旅人、次男富士人、喜志子

いろんな人に対して、同じような温かい正直な向き方をしているなあと思うんですけれどね。あとは、米川さんに。

伊藤一彦 そうですね、今話を聞いていていますが、やっぱり人間でも自然でも好きになる。その力がすごいですよ。自分に縁のある人であろうとなかろうと、目の前の人を好きになって、目の前の人といい関係を結ぶ。牧水ってのはね、私心、私心が無い。まあ日本人にはそれが一つの伝統だと言って来ま

したけれど、「真心」っていう言葉でね。私心がほとんどないですよ。だから、多くの人が、牧水って決して話は上手じゃないし、うまいことを言うわけじゃない、どちらかと言うと、無口なタイプですよ。だけど、みんなから信頼されて愛されるっていうのは、常に、この人に相談すれば何とかしてくれるとか、この人に話せば、自分のことを受け止めてくれるとか、何かそういう信頼感を牧水は持たれていますよね。それは、やっぱり相

手の人を好きになる力、まあ自然もそうかも知れませぬ。何か相手と一つになつて、相手を好きになる力つていうのが、すごく強いような気がしますね。この「肌にやや」の歌は、やっぱりこれ、「かなしい」というのは、牧水の最高のほめ言葉ですものね。白鳥は哀しからずや」もそうだと思いますけれどね。最高のほめ言葉がやっぱり、この「かなしい」という言葉じゃないかと思うんですけれどね。

牧水は、子供がちゃんと自分にできるかどうかを心配しているんですね。ちよつと放蕩の時代があるんですから。そうしたら、子供四人に恵まれて。特に最後の富士人さんが生まれた時には、自分がかなり年齢がいつてから生まれた次男ですから、すごくよろこんで、「富士人」つていう名前を、富士山のところで生まれたので付けましたけどね。非常に子煩悩だったですよ。

じゃあ、米川さん、すみません。いつもお待ちたせして。若い時の父親の牧水と、もうちよつと年をいつてからですね。お願いします。
米川千嘉子 はい、私が挙げた「家族のうた」は、両方とも子供の歌なんですけれども。

膝に泣けば我が子なりけり離れて聞けば
何にかあらむ赤児ひた泣く

一首目は大正二年で、旅人さんが生まれてまだ三ヶ月くらい、この一連の題が「夏の日の苦惱」つて言うんですが、そういう歌で子供が小さくて、ぎゃあぎゃあ泣いているわけなんです。そして、この歌の隣りには、
ことさらに泣かすにや子に倦みしにやか
たはらにゐて手もやらぬひと

というふうな、喜志子のことを詠っていて、わざとお前泣かしてんじゃないかと。泣いているのに、手も差し伸べないでつて言っているんですね。で、そういうのを自分も聞きながら、膝に抱くと確かに僕にも似ているし、とてもかわいい。ちよつと離れてみると、あのぎゃあぎゃあとした声は何なんだ、というふうな若いお父さん、まだ二十代の終わりごろの若いお父さんの困惑つていうのが分かるんですね。「離れて聞けば何にかあらむ」つていうような距離感というか、父親は無条件の愛情を持って、というふうなことじゃなくて、自然主義的など言いますか、ちよつと距離を保持した見方をしているんだけれど。

たとえば、こういう距離なんかでも、啄木なんかだと、もつとなんか暗い感じというか、子供がかわいそうなところまで、自分も子供も追い詰めないといけないんだけれども。牧

水の場合は、何かそこが「離れて聞けば何にかあらむ」あたりに、やはりちよつとしたユ一モアというのがあるような感じがするんですね。甘いだけけれども、何となく、ふわつとしたものがある。牧水の中の自然主義的なもの、柔らかさというのがとても大事なような感じがしますね。そして、二首目に挙げたのが、これは昭和二年の歌で、亡くなる前年なんです。

留守居する子等うちつどひたうべるむそ
の桃の実を父もたぶるよ

という歌で。これは、朝鮮に揮毫きごうの旅に喜志子と出掛けているんですね。で、帰りに具台が悪くなつて、別府温泉に滞在をしている。ちよつとこの時、子供たちは、計算をしてみると十四歳、十二歳、八歳、六歳の四人なんです。だから五歳からもつと小さい子たちばかりとか、十五歳からもつと大きい子たちばかりつていうんじゃないかと、十代半ばから六歳までの一番にぎやかな、いろんな年齢の子たちがごちゃごちゃごちゃごちゃいるつていう、そういうにぎやかさを「うちつどひたうべるむ」つていうことで想像しているわけですね。自分もにぎやかさの中に早く戻りたい。みんなのしく、桃を汚しながら食べ

ているだろうなあって想像をしながら、お父さんはこつちにおいて、食べるよ、寂しいよっていう、そういう非常に柔らかい父性っていうのか、それがとても魅力だと思うんですね。こういう、先ほどの栗木さんが挙げられた「讚たたふる」っていう、そういう歌もありますし、とてもこういう、いい歌なんだなあと。ちょっとここに挙げきれなかったんですが。

例えばね、

かきいだき吾子あごこと眠れる癖つきてをりをりおもふその吾子あごこがことを

これ、旅の歌なんです。旅に出て、いつも家にいると、子供を抱いて寝る。その癖が付いているんだ。これ、お母さんの歌じゃなくて、お父さんの歌だっていうのがね、すごく珍しい感じがして。牧水の父性っていうのは、注目だなあと感じるですね。まあ、奥さんの歌、先ほどお拳こぶしがつたんですが、夫婦で歌をやっているとすね、とりあえず……。

伊藤一彦 あ、彼女の家、夫婦で歌い手なんですよ(笑)。

米川千嘉子 とりあえず、ほめといたら平和だぞっていうところがある(笑)。ちょっとそこ、わたし、一割引きくらいなんですけれども。でも、やっぱり優しいですね。奥さん

の脱いだ羽織をね、夜仕事の時に、自分の膝にかけて仕事をするっていう歌なんかも、とてもいい歌だと思います。

ぬぎすてし妻が羽織を夜よ為しごとの膝ひざにかけつついとしと思へ

伊藤一彦 やっぱり、大正時代ってね、まだね、男は強くなければならない。父親は厳しくなければならない。何か、そういう家父長的な父親が一般的なイメージだと思うんですね。その中で、牧水は妻と対等な夫婦っていうんですかね。非常にやさしさを出しているというのが、ちょっと近代短歌の中で、僕は珍しいんじゃないかと思ってね。そのやさしさを出すのに、牧水の柔らかい文体が非常にびつたりと合っている気がするんですね。

段々時間が無くなりますので、どうしても最後に、やっぱり「自然」「旅」ということに触れなくちゃいけませんので。

今のように家族を愛しているにも拘かからず、突然、旅に行きたくなつて、行つてしまおうが牧水であつて。牧水にそういう歌がありますけれども。自分はどうしてこんなに急に旅に出たくなるんだらうというね。そういう歌がありますけれども。こんな歌がありますね。これは『秋風の歌』にあるんです。プリントに

はありませんけれども。

妻つまや子こをかなしむ心こころわれと身みをかなしむ
こころ二つながら燃ゆ

という。自分は家族を愛している、にも拘らず、突然旅に行きたくなる。そして、旅に行くと家族に会いたくなくて。小島さんが言われたとおりに、いい人妻を見たら、自分の妻を思い出して帰りたいくなるっていうね。なんか、二極を行ったり来たりしているとところがあるんですね。そういう牧水の「旅のうた」「自然のうた」。今度は米川さんからいきたいと思いますか。今度米川さんからは牧水の歌の本質が出ているのかも知れません。

「旅のうた」「自然のうた」ということで、米川さんからお願いしましょう。

「旅のうた」「自然のうた」

米川千嘉子 最後の方にあります「自然のうた」二首と「旅のうた」を挙げていきます。先ほど、馬場先生が言われましたとおり、夏に『みなかみ紀行』の旅に行つて来たんです。それがとても素晴らしかったので、八月に最初に先生たちと行つたんですが、十月に、二回目の『みなかみ紀行』の旅をいたしました。

伊藤一彦 ご主人と行かれたんですね(笑)。

米川千嘉子 牧水が行ったのは、主に秋なので、やっぱり秋にぜひ行きたいと思って行ったんですね。で、自ずと、ここにあるような歌になったんですが、

枯れし葉とおもふもみちのふくみたるこの紅くれないをなにと申さむ

これ、「みなかみ紀行」の旅の中で、楓かえでの紅葉もみぢがずっとつづいていて、川原の所まで紅葉もみぢが出てくるわけですよ。それを見ながら、友だちと一緒に昼食を食べていて、紅葉もみぢの木を見ていると何十分も無言で二人でいた。そういう無言の時間、何十分も過ごせるっていう旅っていうのは、もう私たちにはあんまりない



牧水（千本松原にて、大正11年冬）

なあということも思いますし。やっぱり、この「紅くれないをなにと申さむ」というところの何とも言えない「よろしき」っていうか、これが散文に出来ないよさですよ。この語り口のよさでもありますけれども、牧水って「木のうた」も多いですけども、「葉っぱのうた」も、ものすごく多くて。何で多いのかというと、やっぱりすごく大きい自然を手に触れて感じられるものは、一番身近なものが葉っぱだったっていう感じがして。まあ、あの、額田王みかたのおおきみとかそういう線上にあるのかも知れないけれども。その葉っぱを見たときに本当に間違いない自然の一部に触れているっていうよろこびっていうのは、本当にすごく柔らかに

出ているなあというふうに思いましたね。次の「旅」も一緒にやっていますか。

伊藤一彦 ああ、いいです、一緒に。「犬のうた」も一緒に。

米川千嘉子 初めの歌「犬の歌」。これは小島さんも「犬の歌」が挙げてあったので。これはね、「家族のうた」にも入るかも知れないなと思っただけです。これは、

「小自然」としての命の歌っていうか。牧水は、初期の自然や旅の歌と、中期以降の自然や旅の歌と違って来ている気がするんですけど。特に家庭が安定していた後の「旅のうた」「自然のうた」っていうのは、こういう歌になって来て、蟹とか犬とかそういうのを発見しているんですね。この「犬のうた」は、牧水の家で初めて犬が子を産んだだけども、十一匹産んじやったんですね。犬でもやっぱり十一匹は多いだろうと思いつつ、犬も思っているし、牧水も思っているわけです。

生める子のおびただしきを眺めつつ舌だして寝て母犬はをる

という。あー、しょうがない。生きていることとは、命の否応おぼやうのない感じっていうんですかね。そういうのがとてもあって。これもやっぱり、牧水の自然観というか生命観せいめいかんというのを表わしている。だから、非常に落ち着いた家庭生活が発見した自然とか生命せいめいなのかもしれないっていう。

伊藤一彦 沼津時代ですよ。『旅のうた』も一緒に。もう時間が・・・。

米川千嘉子 はい、そうですね。最後の「旅のうた」は、先ほど、馬場先生もおっしゃいましたような、行く先々で出会った人の・・・。

私、この歌、とても好きです。

先生のあたまの禿もたふとけれ此処に死なむと教ふるならめ

という。ちょうど『みなかみ紀行』の旅の中で、三校くらい小学校を通るんですね。そこで、たまたま「引沼村」っていうのかな。それを通った時に、二十人くらいの生徒に対して、老いた先生が、禿げの先生が、裸足で体操を教えているんですね。で、なんていうか、人間の涙ぐましさっていうんですかね。牧水はいろんな人に会いながら、大抵涙ぐましさを見る。涙ぐましさにツーンとしながら、どんどんどんどん旅をするっていう感じが、私がこの歌を選んだ理由です。

伊藤一彦 それにしても、「先生のあたまの禿もたふとけれ」つてのはねえ、言えそうで言えませんよ。これ、なかなかね(笑)。おかしみつてすごくありますよね。本人は真面目に詠っているんだけど、何かおかしみつてのが、何か感じられて、何か心が温かくなるっていうのかね。涙ぐましいような、こちらの心が温まるようなね。でも、旅先で、そういう小学校の先生とか子供たちに目を留めるのも、山間の村で育った牧水らしいですけれどもね。非常にやさしい視点ですよ。じゃ

あ、小島さんお願いします。

小島ゆかり はい。米川さんの先生の禿の歌なんですけれど、私の先輩の奥村晃作さんて人が、こういう歌を作っていますね。

ハゲアタマ、ハゲアタマとぞののしりし少年の日は単純なりき 『三齡幼虫』

という歌を作ってます(笑)。この先生も禿げ頭禿げ頭つてののしっていたころは、自分は幼くて愁いがなかったからあんなことができただ。成長して自分も愁いが出来ると、とてもあんなことはできないという、そういう歌なんですけれど。あの、どっちも、いい歌だなあと思います。

自然と旅。これはおそらく地続きであろうなあと思うんですね。それで、まず、牧水はなぜ沼津をこれほど愛して、そして沼津へ来てから、その後から、自然に対する歌も、それからいろんなことに対する旅の仕方も変わって来たのかなあつてことを考えるんですけど。大岡信さんが、牧水の好きなものを詠んだ歌つていうことで、

水の音に似て啼く鳥よ山ざくら松にまじれる深山の昼を

という『海の声』の歌を挙げてらっしゃったこ

とがあるんですが、これを見てもみると、水の音、水があつて、鳥がいて、山桜があつて、松があつて、山があるんですね。あ、これ沼津だなあつて思うんですね。沼津には、ゼーんぶあるんですね。そういうことも、おそらく、心も体も牧水を包み込んでいったという風土があつたんだらうかなと思いますね。それからもう一つは、「旅」っていうものの語源をたどっていくと、「たぶせ」つて言葉があるんですね。田に伏せる。あるいは田に廬つて書くんですね。昔、農作業の時、男は普段は家において、寝るつていう時は「寝る」つて言葉は「共寝」なんです。米川さんがおっしゃったように、寝るつてのは、男女が共寝する。奥さんと共寝をするんですけども。その刈入れの忙しい時期とか田植の忙しい時期は、男は田の脇に廬を作つて、そしてそこで寝て、家族と別れて、まるでですね、「共寝」が出来ない状態。だから非常にさびしい思い、辛い思い、困難な思いをしたつていうようなのが、どうも「旅」の語源としてあるらしいんですね。そうすると、いろいろ考えていくと、牧水の「旅」つていうのは、とても語源的な、本質的な旅に近いなあ。文学者たちが文学的放浪として家族を顧みずにくらうろとあちこちをして、何となく文学を

考えたというのとは少し違って、家族もあるんですね。家族もきちんと持っていて、そして、ですけど、何か辛い、辛いよ、苦しいよと言いなから、でも生きるために、何か行かなきゃいけないような衝動でもって旅に出る。こういうのも、一つの牧水の特徴かなあと思うんですけども。まあ、そんなことを前提にして「自然のうた」、これは大変好きな歌で、『海の声』の歌ですが、

朝地震す空はかすかに嵐して一山白き山
ざくらかな

という歌ですが。初句切れのね。朝、地震が起こって、そして空がかすかに嵐して、天と地が呼応するような、そういうふうな中で、「一山白き山ざくらかな」。のちに、『山桜の歌』の名作がたくさん出来るんですけど、この歌を読んだ時に、私は後鳥羽院の歌を直ぐに思い出したんですね。新古今集のこういう歌です。

み吉野の高ねの桜ちりにけり嵐もしろき
春のあけぼの

「み吉野」ですから、当然山桜であるわけで。そうすると、牧水の歌もそうですし、後鳥羽院の歌もそうで、山桜と嵐っていうのは何で

よく合うんだろうな。桜を雪とか霞とかそういうものにたとえた、風とかの歌はたくさんあるけれども、嵐っていうものと山桜、桜ですね、一つの世界の中で詠うっていうのは、おそらく古くは後鳥羽院、近代では牧水だろうなと思つて。二首とも大変な名歌だと思うんですけどね。まあ、そんなことを思いながら、この山桜の歌。後半の『山桜の歌』はみなさん大変よくご存じのもので、若い時の山桜の歌。それから『路上』の犬の歌ですね、

枯草にわが寝て居ればあそばむと来て顔
のぞき眼をのぞく犬

自分も犬が大好きですから、こんなのに出会うと目がぎゅつとしてしまつて。牧水の飼つていた、これは飼犬だつたと思ひますけれども。独身時代ですけれどね。この犬も牧水も一緒に抱きしめてしまいたくなるくらい、胸がキュンとしますが。よく犬の特徴を見ていますよね。先ず「あそぼう」つて言つて「顔をのぞいて」来て、そしてさらに「眼をのぞく」つてね。これはやっぱり犬だなあと猫はのぞく前に、先ずこう家政婦さんみたいにね、柱の陰からじいっと見ていて（笑）。それで、ちよつとずつ、ちよつとずつ寄つて来て、最後はじいっと見ますけれども。犬と猫

と本当に動きが違って、これは犬だなあと思ひます。犬の歌は、牧水たくさんあるんですけども。猫の歌は、何か家族会議か何かで、宮崎に引き留められたときに、非常に紛糾した中で、誰かがね、踊らせている。あの歌くらいしかあんまりないですけどね。犬の歌はたくさんある。それから、これは飼犬ですけれども、私、印象深いのは、『山桜の歌』の中に野犬の歌があつて、

ゆくりなく夏野が原にあらはれし真黒き
犬は遠くより吠ゆ

という歌なんです。これなどは本当に野の犬だし、とてもワイルドな感じがいいなあと思ふんです。急いで旅の歌に行きますが、先ず、二首目の『くろ土』の歌から

虎杖のわかきをひと夜塩に漬けてあくる
朝食ふ熱き飯にそへ

これも好きな歌で、比叡山に行った時の歌なんです。京都から比叡山に行くんですけど。山の方に行つたら、頂上の所にお寺があつて、そこに寺男が、ちよつとおじいさん、孝太爺、伊藤孝太郎さんつていうおじいさんがいて。お酒好きで、お酒好きで、あまりお酒好きで、妻にも見放され、家もなくしてし

まったというような人なんですけれども。そういう所に牧水は泊って、まあ大変に意気投合して。牧水は、そこで薪割りをしたり、お水を汲んだりする。そのおじいさんが御膳を整えてくれる。ひろーい板の間でね。ちよつと来いとか、言ったかどうかわからないけれども、一緒に呼んでお酒を飲む。もう本当に押し頂くようにして飲む。拜むようにして飲むから、それがたのしくて、たのしくて。わざわざまた、美味しいお酒を買いに行つてね。飲ませてやるというようなところで、別れ難くなつて、牧水が下山するときに降りてくる。さつきの馬場さんの話でも、いろんな人がついて来る。麓まで来るんだけど、それでもまだ別れ難い。ついには、京都までついて来るんですね。何か無口そうなおじいさんだから、そんなに二人でべらべらしゃべって歩いたとは思えないから、黙って歩きながら、時々顔を見合わせて、「うん」とか「うん」とか、にこつとしたりしながら、一緒に行つたのかなあと思うんですけど。まあ、もつともつと話したいんですけど、ちよつと時間がないので。そういう中で、「虎杖のわかき」、野草ですね。山の野草ですけれど。虎杖の若い、まあ芽のちよつと伸びたくらいですかね。

それをひと夜、塩に漬けて、明くる朝、熱いご飯に添えて。おいしそだな。食べてみたいなあと思うんですけども。私は「虎杖のわかき」を探し当てられないだろうなと思います。最後の『独り歌へる』の「旅のうた」、

父の髪母の髪みな白み来ぬ子はまた遠く旅をおもへる

これはやつぱり、伊藤さんが最初におつしやつた、なぜ旅に行くのかということも関係があると思うんですが。父も愛し、母も愛し、妻も愛し、家族も愛している。大事に思っているけれども、でも旅に行くんだ。ずいぶん前ですけど、さつきお名前を出した大岡信さんが講演のときに、ちらつと、こういうことをおつしやつて。「牧水は非常に愛される歌人で、自然を詠つて、お酒を詠つて、旅を詠つて。何かプラスの面をね、皆さん非常に評価されるんだけど、牧水がそれだけだと思つては間違いなんだ。牧水は、やつぱり近代的なデカダンを抱えた文学者だ。デカダン、退廃とか、常識的なもの、壊れるべきものを何か踏み越えて行つてしまふ。はみ出ていってしまう。そういう文学者であつたんだ。当然、近代の文学者はみんなそういうものを抱えていたんですね。だから牧水は単に

口当たりのいい自然歌人とか、酒の歌人じゃなくつて、本質的にデカダンを抱えた人だつたんだ。その文学的な中心というものを見落してはいけない」ということをおつしやつていて。それはとても心に響いて、いつも思い返すんですけど。やつぱりこのお父さんやお母さんの髪が白くなつて来たことへの「労りや、いろんな思いやりがあるけれど、それでもやつぱり自分は遠く旅を想っている。ここに大岡さんのおつしやつたものがあるんじゃないかなあ。牧水の「旅」をもつとゆつくりとね、考える時間があつたら、そういうことに当然触れて行くようなテーマではないかなあと思うんです。

伊藤一彦 そうですね、牧水自身もなぜ自分は今旅をしているんだろうかと思ひながら旅をしているんですよね。だから、はつきり自分も分かつていたわけじゃなくて。旅に行かずにいられなくつて、旅をしながら、なぜ自分は今こうやつて旅をしているんだろうと。だから、人生とは何かというのと同じような行為が、そのまま旅と同じだったんでしようね。栗木さんお願いします。「自然のうた」

栗木京子 はい。「自然」旅「ふるさと」とまあ、同じようなジャンルなんです。

「自然のうた」の

山に来てほのかにおもふたそがれの街に
のこせしわが靴の音

という歌で。先ほどね、伊藤さんのお話で、
牧水には二面性があるというお話がありました。
て。まあ海も愛し、山も愛し、それから、ふ
るさとも大事だけれど、都市も愛し。それか
ら、家も大事で、定住生活、家族を愛しなが
ら、旅へあこがれて行くっていう気持ちもあ
る。その二面性の中で、それは裏も表みたい
な小さな二面性じゃなくて、割と振幅が大き
く、わーと揺れ動く。それによって世界は豊
かになるっていうね。そういう魅力があるの
かなと思うんですね。まあこの歌の場合は、
対立項を敢えて挙げれば、自然対都市とい
う、街に残した私の靴の音が、山の中でもま
だどこかでこう、靴音だけがね、独り歩きし
て響いているような、ね。こういうなんかね、
ちよつとシユールな歌っていうのも、牧水は
時々あるんですね。星空を眺めていると、自
分がどんどんどん小さくなって来て、そ
こに吸い込まれるとか、という歌があつた
り、なんか不思議な、ちよつと自然主義つて
いうだけでは含みきれない、抽象的な概念み
たいなところがあつて。そういう意味で面白

いと思います。それはやつぱり根本に自然に
対する一体感があり、好きになつてしまう気
持がある。先ほど、馬場先生のお話の中で出
た、やつぱり歩くっていう、歩いて、旅にし
ても、街でも、やつぱりテクテク歩いていた
わけですね。考えて見ると、馬場さんの話を
聞いていて、「あ、そうか」と思ったんですけ
れど。私たちがみたいに乗り物にホイホイ乗っ
てなくて、どこにいても歩いている。だから
それが肉体的として、自然を詠んでも、街を
詠んでも、歌の中に焼き付けられる。そうい
うところがあるのかなあと思いました。それ
から「旅のうた」ですね。

石越ゆる水のまろみを眺めつつこころか
なしも秋の溪間に

これは、秩父へ行つた時の歌ですよ。こ
ういう歌もね、細々と述べていない。「こころ
かなしも秋の溪間に」なんていうのは、一種
のちよつとワイルドな常套句みたいな感じが
あつて。大変気分よく、すーと流しているん
だけれども。でも上の句がねえ、細やかなん
ですよ。水が石を越えて行く時に、その秋
の山の水が、まろく越えて行く。それで水の
流れの清らかさとか、美しさとか、澄み渡つ
た感じが表れていて。こういう、一点に観察

力をピツと凝縮させて、それで表して、後
はあんまり説明しないみたいな、調べで流す。
自然を詠む時に、私なんかこういうところを
お手本にしたいなあと思つている所ですね。
ついやつぱり頭で考えちゃうとだめなんです
よね。比喻を使つてやるうとか思うとだめな
んですけれども。それから「ふるさと」は、

ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋もか
すみのたなびきて居り

これ、まあ大変有名な歌なんですけれど。
これもあの、故郷に大抵アンビバレンスがあ
るんですよ。医師の息子として生まれなが
ら、長男でありながら、後を継がなかったと
いうような負い目もある。文学の道へ進みた
い、都会へ出たいという、そういう気持ちも
抑え切れない。だけど、「ふるさと」というの
は、自分にとって終世宝物のような場所であ
つた。「秋もかすみのたなびきて居り」。普通、
霞つて春のものなんですけれども。秋にも、
やつぱり霞のたなびくような・・・。そうい
うゆるやかな、何かこゆるつたりとした、帰
つて行ける場所が尾鈴の山なんだ、という歌
だね。「秋もかすみのたなびきて居り」つてな
んかいいなあと思つたんですね。霞つてたな
びくもので、現代になると・・・。

霞っていうのは桜の花を隠してしまう。立ち込めて来て隠してしまうもの。あるいは、前川佐美雄さんなんかだと、

春がすみいよ濃くなる真昼間のなにも
見えねば大和と思へ 『大和六百歌』

とかね。隠すものつて、古今集以降現代まで、何となく霞に備わっていたイメージがあるんですけど。ここで何か万葉の本来に立ち返って、霞というのはたなびくものであって、しかも「ふるさと」では、秋でもたなびいているんだよと言っているようなことですね。これも、まったくごちゃごちゃ言っていないんですけども。大らかな、益荒男（あきらのおとこ）みたいなのだなと思いました。

伊藤一彦 この「かなし」も、僕のさっき言った言葉で、最高のほめ言葉ですよ。

栗木京子 多いですね。「かなし」って

伊藤一彦 多いですね。歌会に出すと、「かなし」はダメとか言われますけれどね（笑）。牧水は実感でいくと、どうしても「かなし」と言わずにはいられない。それがやっぱり、さっきから言うように最高の自分の愛情表現として「かなし」をね。もちろんその中には、それがなくなつた時はどうしようという愛しみの心とかね、辛い気持ちも含む「かなしみ」ですけ

どね。

それでは、もう時間になつて、最後に一言ずつですね。牧水の調べの魅力から始まつて、人間性の魅力、自然への魅力とおっしゃっていただきましたが、あんまり時間がないのですけれども、おひとり、一分か二分くらいですけれども。牧水の歌の魅力とか、それから、こういう視点で牧水を読んだらいいんじゃないかということ。二分じゃ無理か、三分くらいかな（笑）。林さん、よろしいでしょうか。はい、じゃあ三分くらいで。栗木さんには、めずらしい牧水の第一次大戦の終つた時の歌を引いていただいて、それを入れていただいて。そのあと、小島さん、米川さん、それぞれにおっしゃっていただいて終わりにしましょう。じゃあ、栗木さんからよろしく。

栗木京子 はい、すみません、私の引用した「社会」というところでね。

たたかひの終れるあとに這ひまはる虫け
たものを追ひ払へ神

『くろ土』という大正十年に出た第十三歌集の歌なんですけれど、こういう詞書（ことばがき）がついていまして、「五ヶ年にわたりし欧州大戦漸く終り、平和を祝ふ歌をと某新聞社より求められしに答へて詠める。」という一連。「平和来」、

平和が来るというそういう一連の中の歌なんですけれど。第一次世界大戦の終つたあとと、まあ、とりあえず平和がやつて来た。それで新聞社からせひそれに対しての歌を作ってくださいと言われて作つた歌ですけれども。ただ単によかつたよかつたという歌じゃなくて、戦意高揚とかそういう戦勝ムードの歌ではなくて。戦いの終つたあと、だけど、その後に虫けだものが這いまわるんだと。その戦争で甘い汁を吸うものが必ず出てくるわけですよ。犠牲になるのは弱い者ばかりです。武器を作り、どこかそれによって搾取しようとする人。そういう虫けだものをどうぞ神様追ひ払つてくれというふうに詠っている歌で。牧水は、昭和三年に四十三歳で亡くなつていますけれども。当然ね、六十、七十と長生きしておられたら、この後、昭和十年、日中戦争から第二次世界大戦、太平洋戦争と、どんどん戦局が進んで行くにつれて、新聞雑誌などから求められて、戦意高揚の歌を作れつていうふうな強制がかつたはずなんです。よね、有名歌人ですから。その時、牧水はどうしたんだろうなあと思うんですね。これだけ潔癖で誠実な人ですから、きっぱり断りたかつただろうけれど、やっぱりそうはできない時代を生きようというのもあつただろうし。

だからそういう意味では、牧水、本当に長生きをしてそういう時、どういう歌を作るのか、見せてもらいたかったという気持もあるし。でも、晩節を汚さずに、「虫けだものを追ひ払へ神」っていうふうな形で、牧水がきっぱりと意思表示してくださったことをよろこびたいという気持ちもあるし。いろんなことを思いながら、この歌を選んでみました。

伊藤一彦 はい。ありがとうございました。じゃあ、小島さん。

小島ゆかり はい。私は今、特に牧水の歌を読んで思うのは、歌の中から聞こえてくる声に、大変張りがあるということなんですよね。例えば、馬場さんの歌にも佐木さんの歌にも張りがあるわけで。伊藤さんの歌にも、もちろんある。で、段々段々、現代短歌っていうのは、世代が若くなればなるほど、声が遠くに届かないような歌になりつつあるんですね。段々前の人にしか聞こえない。あるいは独り言のようになる。最後はつぶやき、ツイッターみたいになって行くっていう傾向がある。もう一度、私たちは単純な内容でもいいので、もつと歌が聞こえてくる、声に張りがある、そんな歌を作りたいなあって、しみじみ思います。

一つだけ加えると、私ちょっと感動したこ

とがあつて。喜志子さんのことなんですけれど。牧水が亡くなって数年後に、日本で初めて「探鳥会」というのが裾野市で行われているんですね。これは、日本野鳥の会を創設した中西悟堂ごどうさんが主宰した日本で初めての探鳥会なんです。なぜかついでと、それまで鳥っていうのは狩るもの、狩りの対象だったけど、中西さんが初めて、「いや、そうじゃないよ。鳥は見つけて、訪ねて行って、見つけて、鑑賞するものなんだ」って言って、探すと

いう字を書いて「探鳥会」を始めたんです。で、その第一回の「探鳥会」の写真は何年か前に私見たんですけれど。その中に若山喜志子さんが写っているんですよ。一緒に行っているんですね。歌人では、北原白秋なんかが行っていますけれど。それを見た時に、「ああ、本当に喜志子さんは牧水を愛していたんだなあ」と思いました。牧水の非常に愛した野鳥というのを、喜志子さんは遺志を受け継いで、もう牧水は亡くなっているのに。数年後に、その初めての「探鳥会」に喜志子さんは参加しているんですね。ただ写真を見ただけなんですけれど、何とも言えない牧水への思いも、私自身深くなつて来る。そんな経験でした。

伊藤一彦 はい。ありがとうございました。じゃあ、米川さん・・・

米川千嘉子 はい。私「自然の歌」でね、あんまり今日大きい自然の歌を挙げなかつたんですけれど、小島さんが「山桜の歌」を挙げられましたように、「山桜の歌」、とても素晴らしいなあと思っています。例えば、写実的に見ると、描写として考えると、すごくざっくりっていうか・・。例えば、

瀬瀬せせ走るやまめうぐひのうろくづの美し
き春の山ざくら花

という歌があるんですけれども。今、それを歌会に出したら、ずーと魚のことが出てきて、最後に「春の山ざくら花」って来るのは形としてちょっと壊れているというか、何か批判されそうなんです。だけど、それを牧水は全身で感じて、そういうリズムとして、小島さんはおっしゃったけれども、そういうふうな歌として自然に感じたものを、もう一回吐き出すというか、そういう素晴らしさが、何か写真浪漫というような、間に入って、広がらなかったものというのがある。だけど、それが実際には、非常に大きな影響をその後に与えているんじゃないかなあという感じがして。岡本かの子が、牧水が亡くなった時に追悼文を書いているんですけれども。牧水は、ご飯を食べるように、自然をね、ご飯のよう

に食べた。お酒のように飲んだっというふう
に言っている。牧水が死んで、自然の子であ
り、親であり、友であり、同胞であり、恋人
である牧水さんが死んで、日本の自然もさび
しいことであろうというふうに、すごく感
動的なのを書いてるんですけれども。かの
子は、「桜百首」って桜の歌を、大連作を書
くんですけれども、「山桜の歌」が出された次
の年に書いていて。明らかに「桜百首」に牧水
の「山桜の歌」が影響を与えているような感じ
がするんですね。そういった意味でも、牧水は、
近代短歌史の中で割と自由な所にいるから、
かえって、そういう短歌史の中で語られる牧
水ってというのは、人間的な牧水よりも、ちょ
っと淡くなっているんだけれども。実はそう
じゃなくて、牧水がいろいろやったこと、発
見したことってというのは、すごく大きいんじ
やないかなど。複雑さも含めて、牧水の複雑
さっていうのも含めて、そんなことを思います。

伊藤一彦 はい。ありがとうございました。
牧水を読みなおす貴重な視点をいくつも出
していただきました。皆さん、こうも、ああも
おっしゃりたいことがいっぱいあると思いま
すが、「ほろよい学会」がありますので（笑）、そ
ちらの方で。

この後、佐佐木幸綱さんのご講演があり、

その後は自由に歓談する時間になります。そ
の場でご意見をおっしゃっていただくとして、
どうも皆さん、ありがとうございました。

林 茂樹 どうもありがとうございました。

「女流歌人、牧水を語る」をプロデュースし
た林茂樹っていうのは大したもんだなあ、と
今あらためて思っております（笑）。（拍手）

この先生方は、若山牧水賞をもらった女流
歌人は、三月の「雛の歌会」のときには、ぜひ
お出でいただくといいことで、お三方とも、
お出でくださっております。その後、いろい
ろなところで三人の女流歌人の先生方とお目
にかかっておりまして、この三人の先生に揃
って、いろいろお話をしてもらったら、どれ
だけののしいだろうかと思ひまして（笑）。

それを伊藤一彦先生にちょっと申しまし
たら、「いや！林さん、それ、いいアイデアだ
よ！」と言ってくださいました。「じゃあ、司
会はお願ひしますよ」ということで、お願ひ
いたしました。

伊藤先生の名司会のもとに、三人の先生方、
それぞれの特徴でお話をしていたら、本
当にありがとうございました。充実した時を
過ごすことが出来ました。心から感謝申し上
げます。

栗木京子 先生

昭和二十九年名古屋生まれ。京都大学在学中に角
川短歌賞に入賞、歌集「綺羅」で河野愛子賞、短歌
研究に掲載の「北限」三十首で短歌研究賞受賞、
『夏のうしろ』で若山牧水賞、読売文学賞受賞、
『けむり水晶』で逍空賞を受賞。歌集に『水惑星』
『中庭』『万葉の月』。歌書に『短歌を楽しむ』等。
『塔』選者、読売歌壇「選者」。

小島ゆかり 先生

昭和三十一年名古屋生まれ。早稲田大学在学中
にコスモス短歌会に入会。歌集「ブライデー」で河
野愛子賞、「希望」で若山牧水賞、「憂春」で逍空賞を
受賞。歌集に『獅子座流星群』『エトピリカ』等。エ
ッセイ集に『蜩の海』『うたの観覧車』など。コスモ
ス「編集委員」「産経歌壇」選者。

米川千嘉子 先生

昭和三十四年野田市生まれ。早稲田大学卒業。「夏櫻
の素描」で角川短歌賞、歌集『夏空の権』で現代歌
人協会賞、「夏」で河野愛子賞、「滝と流星」で若山
牧水賞、「あやはべる」で逍空賞を受賞。歌集「たま
しひに着る服なくて」「一葉の井戸」「衝立の絵の乙
女」、歌書に『四季のことは一〇〇話等』「かりん」
編集委員、「毎日歌壇」選者。

伊藤一彦 先生

昭和十八年宮崎市生れ。早稲田大学卒業。評論
『若き牧水』で宮崎県文化賞、歌集『月号の歌』で読
売文学賞、「微笑の空」で逍空賞、「月の夜声」で齋藤
茂吉文学賞受賞。歌集に『暎鳥記』『青の風土記』、
評論に『牧水の心を旅する』『あくがれゆく牧水』
『命の碎片』牧水かるた百首選、編著に『若山牧
水歌集』等。「心の花」選者、「毎日歌壇」「産経歌壇」
等の選者。読売文学賞、若山牧水賞などの選考委
員。若山牧水記念文学館館長。

「女流歌人、牧水を語る」

栗木京子 選

【恋】

山を見よ山に日は照る海を見よ海に日は照るいざ唇を君
短かりし一夜なりしか長かりし一夜なりしか先づ君よいへ

『海の声』

『海の声』

【家族】

着換すと吾子を裸体に朝床に立たせてし
ばし撫で讀ふるも

『朝の歌』

肌をややかなしきさびの見えそめぬ四人
子の母のはしきわが妻

『黒松』

【自然】

山に来てほのかにおもふたそがれの街に
のこせしわが靴の音

『独り歌へる』

【旅】

石越ゆる水のまろみを眺めつつこころか
なしも秋の溪間に

『溪合集』

【ふるさと】

ふるさとの尾鈴の山のかなしきよ秋もか
すみのたなびきて居り

『みなかみ』

【社会】

たたかひの終れるあとに這ひまはる虫け
だものを追ひ払へ神

『くろ土』

小島ゆかり 選

【恋】

海見ても雲あふぎてもあはれわがおもひ
はかへる同じ樹蔭に
君かりにかのわだつみに思はれて言ひよ
られなばいかにしたまふ

『海の声』

『海の声』

ことごとく落葉しはてし大木にこよひ初
めて風のきこゆる

『別離』

【家族】

肌をややかなしきさびの見えそめぬ四人
子の母のはしきわが妻

『黒松』

【自然】

朝地震す空はかすかに嵐して一山白き山
ざくらかな

『海の声』

枯草にわが寝て居ればあそばむと来て顔
のぞき眼をのぞく犬

『路上』

【旅】

父の髪母の髪みな白み来ぬ子はまた遠く
旅をおもへる
虎杖のわかきをひと夜塩に漬けてあくる
朝食ふ熱き飯にそへ

『くろ土』

米川千嘉子 選

【恋】

君かりにかのわだつみに思はれて言ひよ
られなばいかにしたまふ
十五夜の月は生絹の被衣して男をみなの
寝し国をゆく

『海の声』

『海の声』

わが妻よわがさびしきは青のいろ君がも
てるは黄朽葉ならむ

『独り歌へる』

【家族】

膝に泣けば我が子なりけり離れて聞けば
何にかあらむ赤児ひた泣く

『秋風の歌』

留守居する子等うちつどひたうへるむそ
の桃の実を父もたぶるよ

『黒松』

【自然】

枯れし葉とおもふもみちのふくみたるこ
の紅るをなにと申さむ
生める子のおびただしきを眺めつつ舌だ
して寝て母犬はをる

『山桜の歌』

『黒松』

【旅】

先生のあたまの禿もたふとけれ此処に死
なむと教ふるならめ

『山桜の歌』

記念講演 「牧水と酒」 佐佐木幸綱



司会 (林 茂樹)

五年前に「日本ほろよい学会」を沼津で開催した時に、『牧水 酒のうた』を発刊いたしました。その時、佐佐木幸綱先生と伊藤一彦先生に「対談」をしてもらいました。始まってすぐ、佐佐木先生が、「のどを潤したい」と。まさか佐佐木先生にお水を持って行くわけにはいかないで、お酒を持って行きましたら、「ああ、おいしいね」と飲みながら、「皆さんもどうぞ!」とおっしゃいました。実は、各テーブルにお酒を用意してありました。みんなそれを飲み始めまして(笑)。あとで、「何やってるんだ! 大事な大事な講演を聴くのに、酒を飲みながら聴くとは!」とお叱りを被りました。今回は、水とウーロン茶しか出してごさいません(笑)。佐佐木先生の講演をしっかりと聴いていただきたいと思っております。

佐佐木先生の略歴につきましては、皆様にご存じだと思いますので省略いたしました。「日本ほろよい学会」会長、早稲田大学名誉教授、佐佐木幸綱先生でございます。(拍手)

先生、よろしく願いたします。

佐佐木幸綱

「日本ほろよい学会」会長の佐

佐木幸綱でございます。「日本ほろよい学会」と「牧水顕彰会」とは、本来は別の会なんですけれども、いろいろとお世話をいただいている沼津牧水会の林さん、酒好きな方だし、「日本ほろよい学会」を立ち上げた秋田の石川鍊治郎君も酒好きで、牧水が好きだ。今日の昼間、活躍された伊藤一彦君も、宮崎の牧水文学館の館長ですが、これはまあ大変お酒が強い。今日は酒の強い方がいっぱいお出でになるけれども、伊藤一彦君はの中で一、二じゃないかと思えます。いつも、いい空気を吸っているものですから大変お酒が好きだ。私もまあまあ(笑)。大体同じ位の年齢なんです。伊藤君がちよつと若いですが。

「牧水顕彰会」と「日本ほろよい学会」とは親戚付き合い、あるいは、兄弟のような会なんでしょうね。そんなことから、今回一緒にやらせていただきました。牧水が好きなのは、お酒が好きだし、お酒が好きな方の大部分は牧水が好きだ。

そういうことで、「牧水顕彰全国大会」に引きつづいて「日本ほろよい学会」をやらせていただくということにいたしました。

「日本ほろよい学会」の初代名誉会長だった暉峻康隆先生も、あの世できつとおよろこび

になっっているんじゃないかと思っております。
さて、「学芸」ですのね(笑)。あの
辺に酒瓶が並んでいて、「早く開けてくれ、早
く開けてくれ」と言っておりますけれども。
「学芸」なので、何となく少し真面目な話をさ
せていただこうかと思えます。

「日本ほろよい学芸」は、今まで、例えば、
秋田県出身の直木賞作家の西木正明さんと秋
田の飲み屋さんの名物女将との対談とか、あ
るいは東大の学生四、五人と若手の芸者さん
四、五人が日本酒の将来を語り合うシンポジ
ウムをやったりですね、いろいろと学芸みた
いなことをやっているわけでして。今日も、
「牧水の歌」、そして「酒のうた」について多少
話をさせていたただきたいと思えます。

五年前の沼津での「日本ほろよい学芸」、あ
んまり聴いている人がいなかったようですけ
れども(笑)、「酒のうた」についてのお話をさ
せてもらいました。また、宮崎でもね、牧水
の「酒のうた」についていろいろ話をしている
んで、今日は、牧水の「酒のうた」については、
あらずじだけお話をして、ぜひ暗記して欲し
い「お酒の名歌」をいくつかご紹介して、出来
るだけ早めに終わりたいと思っておりますの
で(笑)、少しの間、我慢をしていただければ
と思います。

『牧水 酒のうた』という本があります。沼
津牧水会が出した本で。これは、「ほろよい学
芸」の人にとつてはバイブルみたいなもので、
ぜひ買っていたいただきたい。そして、できれば、
毎日酒を飲む前にチラチラと見ていただく。

牧水の「酒のうた」は、全部で三百六十首
くらいあるんですね。その一割の三十六首く
らいは暗記していただきたいと思っております。
牧水は、四十三歳の生涯で約八千首の歌を
作りました。その内の三百六十首が「酒のう
た」なんです。酒が好きだから「酒のうた」
ができるわけじゃなくて、やっぱりお酒が好
きで、なおかつ「酒のうた」が好きじゃないと
三百六十は作れない。この中にも短歌をお作
りの方がいるかと思えますけれど、何か自分
の好きなものを三百以上作った方はあんまり
いないんじゃないか、さつき、牧水の「山桜
の歌」というのがあって、それから岡本かの
子の「桜百首」というのがある、という話があ
りました。あの、百、同じテーマの歌を作る
のはかなり大変なんですね。それをやっぱり
三百というのは相当大変なんで、そういう数
かと思っただければいいと思えます。

牧水の「酒のうた」、ここに書いたのを暗記
していただきたいと抜粋して参りました。一
番から四番までが牧水の「酒のうた」の代表的

な、有名な歌です。

白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はし
づかに飲むべかりけれ

「白玉の」というのが上手なんですね。白
玉のような真つ白な歯という意味ですけど
も。それを「白玉の歯」というふうに表示した
ので、何となく普通の人間の歯とは違うよね
あるいは自分の歯を考えると自分の歯じゃな
いような、何となく一ランク上の方にそうい
う所に人を連れてつてくれるんですね。です
からこの歌、牧水の歌で「白鳥は哀しからず
や・・」と共に、一番有名な歌だと思いま
すね。やっぱり愛唱したくなるような、ただ
の酒飲みの歌とは違う、不思議な感じがす
るのは、やっぱり「白玉の」、それが「しみとほ
る」とうまい具合に響きあつて、そして最後
の「秋」とこれがまた響き合う。三つの単語の
バランスがうまくいっている。そして、「白玉
の」というのがちよつと日常の我々とはちよ
つと違う次元にね、ヴァージョンアップした
次元に連れて行ってくれる、ということだと
思えます。

かんがへて飲みはじめたる一台の二台
の酒の夏のゆふぐれ

かへるさや酒の飲みたくなりゆくをじつとはぐくみ居るよ電車に

「かへるさや」は、帰り来て、という意味ですけれども。この二つは、酒飲みの人にはよくお分かりになると思うけれども。飲みはじめたときはなんとなくゆつくりしたペースで飲んで・・・これ三台目になったらもう訳わかんなくなっちゃって、どんどん飲んじゃうという。一合、二合までは、まあ考えて飲んでいるというね。

それから三番の歌も、「じつとはぐくみ居る」という、酒を飲みたい、家に帰ったら飲もうという気持ちを抑えるんじゃない、丁寧に育てている。この真偽はお酒のお好きな方はわかりますけれども（笑）。四番、

われとわが悩める魂の黒髪を撫つるとごとく酒は飲むなり

今日の昼間の会で、牧水が無口な人だという話が出ました。お父さんも無口で、牧水も無口で、二人で飲むときは黙って二人で飲んでいて、ということを書いています。一人で飲むときの感じですよ。お酒の好きな人が、一人で、テレビなんか見ないで、じつと酒を味わって飲んでいる感じが、「黒髪を

撫つるとごとく酒は飲むなり」。まあ、誰の黒髪かは知りませんが（笑）。そういう感じでゆつくりと酒を飲んでいる。この静かな、黙って、ゆつくりと飲んでいる。このあたりが大変うまく表現されて、有名になった歌です。

牧水はどんな飲み方をしたのか。牧水と一緒に飲んだ人が、飲んだ時の雰囲気、牧水のしぐさについて、いろいろ書き遺していますけれども。牧水の酒の飲み方が分かるのは、五番の歌です。

青柳に蝙蝠あそぶ絵模様あそぶの藍深きかもこの盃に

自分が愛用している盃を詠った歌です。柳があつて、そこに蝙蝠が遊んでいる藍色の絵が絵付けになっている盃。これは、沼津の記念館にあるんですね。ぜひご覧になってください。これで飲んだ、っていう実物が沼津の牧水記念館にあります。ご覧になると分かりますけれど、びつくりするくらいちっちゃい。ここに盃が出ていますけれども、それよりもかなりちっちゃい盃です。それでね、ゆつくりゆつくり飲んだようです。特にね、後で話しますけど、朝ね、朝から牧水、酒飲むんですよ。そして長火鉢を置いて、そこに銅壺が

あつて、そしてお燗をしたり、あるいはお燗をしないのでそのまま、常温で飲んだりするわけです。盃がちっちゃいのでひとりでお酌をして、ゆつくりゆつくり飲んだようです。アル中になっちゃった人、この中にもおられるかも知れませんが（笑）、ガバガバ飲まないんですね。ゆつくりゆつくり飲む。で、アルコールが切れると調子悪いで、切れないように、ずーっと飲みつづける（笑）。多分、ああいうちっちゃいのでゆつくり飲むものだろうと。牧水は、最晩年にその盃を使って、愛用していたので、お葬式の後、その盃をお棺に入れて火葬場に持って行って、そして火葬したんだけど、これが壊れずにまったく無傷のままに残った。というので、これを遺品として取っておいた。これが今、牧水記念館に置いてある。実物が置いてあるわけです。それをご覧になって、牧水の飲み方を想像していただければいいと思います。

なぜ、飲みはじめたのか。これは先程、女性の三人の方々の話の中で出て来ました。これに関する歌は十二番ですね。

わが小枝子思ひいづればふくみたる酒のほひの寂しくあるかな

この「小枝子」という女性。昼間の会にご出

席の方は、いろいろ小枝子について話が出て来たのでお分かりだと思えます。失恋をするわけですけども。そして、その『別離』という別れを意味する歌集を出すわけですけども。その時にですね、酒をたくさん飲むことを覚えたようです。

牧水のおばあさんが大変なお酒のみで、その影響でお父さんの立蔵りつぞうという方も大変お酒を飲まれた。ですから、牧水の家には酒を飲む『空気』のようなものがありました。なんか赤ちゃんの時にも、ちよつと唇に酒を乗せてくれたり。みんなおばあちゃんとか、おとうさんがいろいろ悪戯いたずらをして酒をなめさせたようです。ですから、何となく酒に親しんだようです。早稲田に牧水は入るわけですね。そこで北原白秋とか土岐善麿とぎぜんまろといった、将来歌人として有名になる人たちと友だちになるわけですけども、ここでは、あんまり最初のうちは飲んでいないですね。早稲田に入つてしばらくして恋愛をして、そして、それから失恋をする。失恋をした辺りから大量の酒を飲むということを見始めるわけです。まあ、そういうことで、牧水は酒の味を覚えて、また血筋がそういう血筋だったものですから、飲むんですね。ガンガン飲んでおりました。そういうときに朝酒を覚えるんですね。どう

も朝酒についてはね、大体僕が見たところでは三十七、八くらいからかなり朝酒を頻繁に飲むようになったようです。で、四十三で死にますからね。あと六、七年というところで朝酒を飲む。朝酒を飲む習慣というのはどうもお父さんからあったようです。それについては、この『酒のうた』。買わないとだめですよ、これは笑。これにエッセーも収録されています。これは、牧水自身が書いている『私と酒』というエッセーがあります。この冒頭部分に朝酒のことが書いてあります。あの、牧水の家は、大体二十キロくらい山奥に入ったところにあります。ですから、普段はなかなか、当時はね、交通のことがあつて新鮮な魚が食えなかつたですね。新鮮な魚はどうするかというと、夜じゆう走つて、魚を担いで、そして走つて、牧水の家の東郷町にやつてくる。それは大体夜明け方、まだ暗いうちだと書いてありますけれど。その頃着くんですね。生で食べられる魚のことを地元では『ぶえん』と呼んでいたということを書いてありますけれども。その『ぶえんが来た、ぶえんが来た』というからね、一家はみな早起きしたりする。で、家族は家族でそれをご飯にね、おかずを食べる訳ですけど。お父さんが、牧水がごくごく若い時から、男の子と一緒に酒を飲みたいと

いうので、お父さんは、お酒を飲みながらお刺身を食べる。牧水の本当の子どもの頃にはお酒は飲まなかつた。飲まないでいたようにですけども。それでもお父さんがそういう美味しいもので、たのしい酒を飲むときは長男と一緒に酒を飲みたいということで、『ぶえん』が来たときには、しばしば親父に起こされてね、そして酒の相手をするわけです。さつき言いましたように、二人とも無口なもので、ほとんど口をきかないでね、ただ前に座つてお父さんは酒を飲む。お父さんは大変うれしそうに酒を飲まれている。そのことが晩年になつて、お父さんが亡くなつてからも、うれしそうな顔が思い出される。というふうなことを牧水が書いています。そういうことで、牧水は『朝酒』を覚えるということを行いました。えー、六番

時をおき老樹おいきまじうの雫しづくおつること静けき酒
は朝にこそあれ

語り結びが使われているんです。「もう、絶対朝だ！朝しかない！」つていうような意味になりますね。受験勉強のときに、語り結びなんて習われた経験がある方があるかも知れません。最後の所は語り結びになっています。七番。

暁と鶏なく時しとりいでて飲む酒うまし
夜為事のあとに

徹夜で仕事をする。そうすると、明け方に
ほっとして、そして長火鉢の前でゆつくりと
朝酒を飲む。これが何ともいえずにいい。

ウキスキイに煮湯そそげば匂ひ立つ白
けて寒き朝の灯かげに

あの、ウイスキー、ビール、焼酎の歌は、
数は少ないけれどもあります。大体さつき言
ました三百六十首のうち三百三十・・、もう
ちよつとあるかな、三百四十首くらいが日本
酒の歌です。後の二十くらいに焼酎とかワイ
ンも少しありますね。まあ、これはちよつと
珍しい歌ですけれども、ウイスキーの歌です。
そして、ホットウイスキー。ウイスキーにお
湯を入れて飲むという、そういうのを彼は飲
んでいたようです。こういうのがもう一つあ
りますね。

まるまると馬が寝てをり朝立の酒沸か
し急ぐあろりの前に

これは旅先での歌だと思えますね。こうい
うときでも朝酒を飲んでいたりしている。こ
ういう形で朝酒をずいぶん親しんでいます。

その頃から肝臓は痛めるし、それから、肝臓
を痛める前に、アル中が皆あるんですね。や
つぱり、アルコールが切れると不安になつて
くるような感じになる。そういう形になつた
ということだと思えます。一時期は医者がず
いぶん止めて、医者言うことをきこうと思
つて酒をやめようつていうふうに思いました。
この辺り、十三番、十四番・・。

朝酒はやめむ昼ざけせんもなしゆふが
たばかり少し飲ましめ

思い当たる方が笑つておありのようで(笑)。

妻が眼を盗みて飲める酒なれば惶て飲
み噫せ鼻ゆこぼしつ

まあ、こういう。もうひとついきますか。

足音を忍ばせて行けば台所にわが酒の
壘は立ちて待ちをる

酒の壘が、整列して待つていたと・・。

こういうふうには、医者に止められたんだけ
れども、やつぱり飲んじやうよという歌が
なりあつて。それは事実そのとおりだつたん
だろうというふうには思います。まあ、こうい
う形で牧水は酒を現実問題として、肝臓を痛
めて、それでもなかなかやめられなくなつて。

最終的には、医者が「もういい。ここでち
よつと酒を止めても、快方にもう向かわない
から、もう飲みなさい。」という形で、医者が
手綱を離れたような形になつたようで・・。

まあ、四十三歳ですから、かなり体力があ
つたんだと思えますけれど、死ぬ前の日もか
なり何合かのお酒を飲んでおります。九月
十七日に亡くなりますけれど、乗運寺の牧水
のお墓の隣りにお医者さんのお墓があります。
そのお医者さんが牧水を看取つてくれました。
そして、牧水の遺体がどうもアルコール漬け
になつているんじゃないか、というようなこ
とを書いております。九月ですから、温度が
高いですね。そしてドライアイスもない時代
ですから、普通亡くなつて、お通夜をして、
お葬式をして、焼き場に持つていくまでに二
日か三日かかりますね。そうすると大体死斑
が出るんだけれど、死斑が出ないで、きれいな
ままだった。ということをお医者さんがき
ちつと診断書に書き加えておられます。そう
いう形で、本当にまあ、四十三歳、短い生涯
でしたけれど、充実してお酒を飲んで、そう
いう一生だった。そういう中で、お酒が好き
なだけじゃなくて、お酒の歌をということ
を自分で意識をしていました。牧水はやつぱり、
かなり真面目な人でありますから・・。

例えば、旅の歌人になろうとするんですね。旅の歌人になろうとしたときには、ただ旅をして歌を作るんじゃないんです。ちゃんと勉強します。一つは、植物の名前を一所懸命覚ええます。植物園に通って、そして植物の名前を覚える。あとは、養樹園、植木屋さん。育てて売っている植木屋さんですね。その植木屋さんと友だちになって、そして植木の名前、樹木の名前、草の名前を一所懸命覚ええます。

旅の歌人、山を歩く旅の歌人ですかね。それにとつて必須のエクササイズだということで、丁寧に覚ええます。あとは、鳥の名前を一所懸命覚ええます。これは、さつき誰かが話しておりました、『野鳥の会』に、若山喜志子さん、奥様ね、参加されたということがありました。牧水は、鳥を一所懸命覚ええます。声も覚ええますし、姿も覚ええますし、習性も覚ええます。そして鳥の名前がいっぱい入った歌を作ります。秋田の千秋公園に歌碑がありますが、秋田に行つたとき、歌を作ります。ここには一首の中に四つ鳥の名前が入っている歌を作ります。この中に短歌を作る方が何人かおられると思うけれど、短歌一首の中に四つ鳥の名前を入れるっていうのは、めつたにない。作ろうと思つてもなかなかできない。鳥の名前を一所懸命覚える。植物の名前、樹の名前、草の名

前、花の名前も一所懸命勉強する。そうやって、「旅の歌人」になるんですね。自然になつたんじゃないくて、なろうとしてなつた。酒についてもおそろくそうだろうと思います。ただ酒を飲んだから酒の歌を作つたんじゃないくて、やっぱり「酒のうた」を作ろうというかなり強い「意思」があつたというふうに思います。

まあ、これで終わりますけれど、書いたものを・・・一応、説明をします。

左の一番から十九番まで、江戸時代から大體昭和の初め。最後の三つは、今日出場した人です。馬場あき子、伊藤一彦、佐佐木幸綱の三人の「酒のうた」を入れました。それの前までは大體大正十年前後ぐらい以前の・・・江戸時代から大正十年くらいまでの「酒のうた」、「酒のうた」を作つた歌人です。この中で、二、三首だけ触れてみたいと思います。二番をご覧ください。

美酒にわれ酔ひにけり頭かしらゑひ手てゑひ足
ゑひわれゑひにけり

美酒にわれ酔ひにけり頭かしらゑひ手てゑひ足
ゑひわれゑひにけり
『泊しほ舎みや集』清水しみず浜はま臣おみ
これ、ちよつと「ほろよい学会」ではなくて、「泥酔学会」ですけれど（笑）。いい気持そ

うに酔っている歌だというふうに思います。

四番

とくとくと垂りくる酒のなりひさご嬉
しき音をさするものかな

『志しの濃のぼ夫の廻まわ舎みや歌集』橘たちばな 曙あけみ覽

「なりひさご」というのは、ひょうたんですね。ひょうたんにお酒を入れる。ひょうたんはお酒を入れるといい音がします。それから注ぐときに音がします。その音のことを詠っているんですね。それから、その次、五番。

大方はおほろになりて我目には白き盃
一つ残れる
歌集未収録 石いし樽くち千ち亦また

これはいい気持ちそうな歌でしょ。僕はこの歌が「酒のうた」のベストワッ一かなというふうに思っています（笑）。

それから、十番。あの、明治生まれ、大正生まれの女性の歌に、女性はほとんど「酒のうた」がありません。そういう中で、唯一酒の歌がたくさんあるのは、十番の原阿佐緒あさおという人です。大変な美人だったという、写真が残っています。大変豪華な方です。恋多き女であつたわけですけれども、この『涙痕なみだあと』という歌集は、二十六歳、非常に若い時の歌集ですけれども。

今寂し男の前にほのかなる酔心地して
ありしことなど 『涙痕』 原 阿佐緒

昔の恋を思い出しているわけですけども
何となく、思っているだけでも色っぽいよ
うな、素晴らしい「酒のうた」であると思
います。それから、奥さんを詠ったおもしろ
い歌がありますので。十三番、十四番

昨夜ふかく酒に乱れて帰りこしわれに
喚きし妻は何者 『晩夏』 宮 柀二

わが妻が酒惜しむときにたりにたり汝
飲みなど盃持たす 『籬雨莊雑歌』 篠井嘉一

何となく、こういうたのしい歌があります
ので、ぜひ「ほろよい学会」、いろんな酒の歌
をたのしんでいただけたらというふうに思
います。

十七、十八、十九は、読むだけ読んでおきま
しょう。

東北のバッコス祭りどすどすと酔ひて
重たき秋を踊れり 『葡萄唐草』 馬場あき子

これは会津と関係があるんだらうと思いま
す。バッコス祭りです。十八番

騒がしき酒場の卓の花こぶし激励しつ
つひとり酒飲む 『海号の歌』 伊藤一彦

一人さびしく咲いている、酒場に置かれて
いる花を激励しているんですね。「お前、酒飲
めないけれど、がんばれよ」といつて激励を
している。十九番

徳利の向こうは夜霧、大いなる闇よし
として秋の酒酌む 『火を運ぶ』 佐佐木幸綱

これは、説明要らない(笑)。

静かに聞いていただいて本当にありがとうございます
ございます。早く降りる、降りろと思うん
ですが(笑)・・・
どうも、沼津牧水会の皆さまも、ありがと
うございました。

司会 (林茂樹)

幸綱先生、ありがとうございます。みんな、今日
は真剣に聴いていました。たのしく、いいお話を
ありがとうございました。もう一度拍手をお願いします
(拍手)

なお、今、先生が宣伝してくださいました
『牧水 酒のうた』は、もちろん、受付の所に

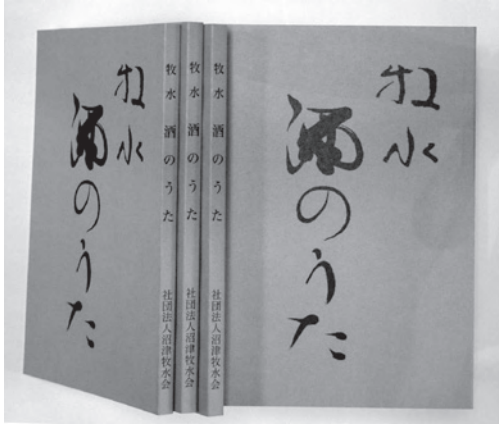
用意してあります。未だ持っていない方は、
お帰りの際に、お求めいただきたいと思いま
す。頒価は五百円です。

それから、もう一つ、ついでに宣伝させて
いただきます。『牧水 富士山』、これを出版い
たしました。今回の沼津牧水会設立二十五周
年・沼津市若山牧水記念館開館二十五周年を
記念しての事業でございます。牧水と言え
ば、千本松原。牧水が沼津に住むことを決意し
たのは、千本松原のほかに富士山があったから
だろうと、私は思っております。

沼津の周辺のいろいろなところへ行つて、
いろいろな表情の富士山が見えるから。そ
れが大きな要素だっただろうと思っていま
す。従いまして、牧水が詠んだ富士山の歌、
百三十首を取めるとともに、牧水が富士山に
ついて語った随筆、紀行文及び童謡を一冊に
収めました。そして、沼津の周辺から見える
富士山の写真、牧水の直筆の半切、色紙、短
冊等の写真を、彩りを添えるために入れてあ
ります。頒価は千円でございますが、安いだ
らうと思っております。十一月一日に発刊い
たしまして、まだ、発刊はやほやでございます
これはもちろん受付に沢山用意してございま
す。ぜひお帰りの際に、忘れずにお買い上げ
いただきたいと思います。

お酒の準備が、ぼつぼつ整いつつあるよう
でございます。このお酒は、宮崎県延岡市の
千徳酒造のお酒を用意いたしました。まず、
千徳酒造のお酒で乾杯をし、その後、東北地
方のこのたびの震災で被害を受けた宮城、福
島のお酒を中心に。そして、もちろんこの
「日本ほろよい学会」発祥の地であります秋田
のお酒を十分に取り揃えてございます。皆さ
ん、ぜひお酒を味わっていただきたい。佐佐
木先生のお話にあった「酒の歌」を思い出しな
から。

「日本ほろよい学会の模様は、会報第
二十六号に掲載してあります。」



牧水の「酒のうた」 (佐佐木幸綱選)

- | | | | |
|---|---------------------------------------|----|--------------------------------------|
| 9 | まるまると馬が寝てをり朝立の酒沸かし急ぐろりの前に
同 | 18 | 酔ひぬればさめゆく時のさびしさに追はれ追はれてのめるならじか
同 |
| 8 | ウキスキイに煮湯そそげば匂ひ立つ白けて寒き朝の灯かげに
同 | 17 | なにものか媚びてをらねばたへがたきさびし故に飲めるならじか
同 |
| 7 | 暁と鶏なく時しとりいでて飲む酒うまし夜為事のあとに
『黒松』 | 16 | 一杯をおもひ切りかねし酒ゆゑにけふも朝より酔ひ暮したり
『白梅集』 |
| 6 | 時をおき老樹の雫おつること静けき酒は朝にこそあれ
『砂丘』 | 15 | 足音を忍ばせて行けば台所にわが酒の壺は立ちて待ちをる
同 |
| 5 | この盃に
『黒松』
青柳に蝙蝠あそぶ絵模様の藍深きかも | 14 | 妻が眼を盗みて飲める酒なれば惶て飲み噎せ鼻ゆこぼしつ
『黒松』 |
| 4 | われとわが悩める魂の黒髪を撫つるとごとく酒は飲むなり
『秋風の歌』 | 13 | 朝酒はやめむ昼ぎけせんもなしゆふがたばかり少し飲ましめ
『くろ土』 |
| 3 | かへるさや酒の飲みたくなりゆくをしつとはぐくみ居るよ電車に
同 | 12 | わが小枝子思ひいづればふくみたる酒のにはほひの寂しくあるかな
同 |
| 2 | かんがへて飲みはじめたる一台の二合の酒の夏のゆふぐれ
『死か芸術か』 | 11 | あど月のみそかの夜より乱酔の断えし日もなし寝ざめにおもふ
同 |
| 1 | 白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけれ
『路上』 | 10 | なほ耐ふるわれの身体をつらにくみ骨もとけよと酒をむさぼる
『路上』 |

酒の歌

(佐佐木幸綱選)

- ① にほどりの葛飾早稲のにひしぼりくみつ
つをれば月かたふきぬ
『賀茂翁歌集』賀茂真淵
- ② 美酒にわれ酔ひにけり頭ゑひ手ゑひ足ゑ
ひわれゑひにけり
『泊泊舎集』清水浜臣
- ③ あすよりの後のよすがはいさ知らず今日
のひと日は酔ひにけらしも
『良寛歌集』良寛
- ④ とくとくと垂りくる酒のなりひさごうれ
しき音をさする物かな
『志濃夫廼舎歌集』橘曙覧
- ⑤ お方はおぼろになりて我目には白き盃一
つ残れる
歌集未収録 石樽千亦
- ⑥ 味噌うづの田螺たうべて酒のめば我が咽
喉仏うれしがり鳴る
『赤光』斎藤茂吉
- ⑦ ウイスキーの強くなしき口あたりそれ
にも優して春の暮れゆく
『桐の花』北原白秋
- ⑧ 死ぬばかり我が酔ふをまちて／いろいろ
の／かなしきことを嘯きし人
『二握の砂』石川啄木
- ⑨ 心なほ壮んに眉をあぐることなきにしも
あらず酔はしめたまへ
『天彦』吉井勇
- ⑩ 今寂し男の前にほのかなる酔心地してあ
りしことなど
『涙痕』原阿佐緒
- ⑪ 箸おきてひとり酌するこの夕べいのちを
洗ふごとくすすしき
『雪客』尾山篤二郎
- ⑫ 電車にて酒店加六に行きしかどそれより
後は泥のごとしも
『歩道』佐藤佐太郎
- ⑬ 昨夜ふかく酒に乱れて帰りこしわれに喚
きし妻は何者
『晩夏』宮柊二
- ⑭ わが妻が酒惜しむときにたりにたりに汝飲
みなと盃持たす
『籬雨莊雑歌』役井嘉一
- ⑮ わからなくなれば夜霧に垂れさがる黒き
暖簾を分けて出でゆく
『右左口』山崎方代
- ⑯ 東北のバツコス祭りどすと酔ひて重
たき秋を踊れり
『葡萄唐草』馬場あき子
- ⑰ 騒がしき酒場の卓の花こぶし激励しつ
ひとり酒飲む
『海号の歌』伊藤一彦
- ⑱ 徳利の向こうは夜霧、大いなる闇よしと
して秋の酒酌む
『火を運ぶ』佐佐木幸綱

佐佐木幸綱先生

昭和十三年東京神田生れ。「心の花」主宰、編集長。朝日歌壇選者、日本芸術院会員。早稲田大学名誉教授。若山牧水賞選考委員。歌集に『群黎』『金色の獅子』『瀧の時間』『旅人』『呑牛』『アニマ』『逆旅』はじめての雪』『百年の船』『ムーンウォーク』等。評論に『萬葉へ』『柿本人麻呂ノート』『男うた女うた』男性歌人篇『万葉集のへわれ』など多数。現代歌人協会賞、詩歌文学館賞、迢空賞、若山牧水賞、斎藤茂吉短歌文学賞、芸術選奨・文部大臣賞、山本健吉文学賞、現代短歌大賞、読売文学賞等を受賞。平成十四年紫綬褒章受章。

沼津で牧水顕彰全国大会

女流歌人の話、終了後ほろよい学会



歌人の馬場あき子さんが講演した
=沼津リバーサイドホテルで

きつと沼津は住みやすい所ということでしょう。沼津の自然と海の幸。皆さんも存分に楽しんでください」と全国からの参加者を歓迎した。

公益社団法人沼津牧水会（林茂樹理事長）は六日、第10回若山牧水顕彰全国大会を沼津リバーサイドホテルで開催。約三百二十人が参加した。同会が運営する若山牧水記念館の開館二十五周年記念事業の一環で、宮崎県や埼玉県など牧水ゆかりの地からも多くの人が訪れた。

開会の言葉で栗原裕康市長が、牧水が後半生を沼津で過ごしたことに触れ、「牧水が選んだ沼津。

大会では、歌人の馬場あき子さんが「牧水と旅」と題して講演したほか、「女流歌人、牧水と語る」というテーマで栗木京子さん、小島ゆかりさん、米川千嘉子さんによる座談会が開かれた。

また、同日夕方には、同じホテルで第11回日本ほろよい学会が開催され、約三百七十人が来場。歌人で同学会会長の佐佐木幸綱さんが「牧水と酒」という題で講演した後、牧水ゆかりの地などの銘酒を堪能した。

沼津朝日

平成二十四年十一月八日（木）

静岡新聞

平成二十四年十一月七日（水）

全国から牧水ファン

歌人馬場あき子講演

沼津

近代を代表する歌人野市、生誕地の宮崎県若山牧水の功績をたたえる団体や関係者が集う第10回若山牧水顕彰全国大会（沼津牧水会主催）が6日、沼津市水記念館長も出席した。沼津市若山牧水記念館の開館25周年記念事業の一環。牧水が没した沼津市や複数の歌碑が残る橋

栗木京子さん、小島ゆかりさん、米川千嘉子さんの女流歌人3人による座談会も行われた。

全国大会終了後、旅酒をこよなく愛した牧水にちなみ、東北地方の酒などをそろえた「第11回日本ほろよい学会」も開催した。

歌人の馬場あき子さんは「牧水と旅」と題して講演した。牧水が1922年（大正11年）に群馬の温泉を巡った「みなかみ紀行」などを例に挙げ、「足で歩いてきた感動や訪ねた情熱が感じられる。牧水は記録をする目で旅をし、出会った人や情景を愛した」と語った。

あとがき

昨秋、社団法人沼津牧水会設立二十五周年・沼津市若山牧水記念館開館二十五周年の記念事業として、特別企画展「牧水と沼津」を催し、記念出版「牧水 富士山」を刊行したほか、十一月六日に、「若山牧水顕彰全国大会」と「日本ほろよい学会」を開催いたしました。これらの事業についての模様は、「会報」第二十六号に掲載いたしましたので、ご覧ください。

「若山牧水顕彰全国大会」における馬場あき子先生の記念講演「牧水と旅」、伊藤一彦先生の司会で栗木京子、小島ゆかり、米川千嘉子の三人の女流歌人による座談会「女流歌人、牧水を語る」、また、「日本ほろよい学会」における佐佐木幸綱先生の記念講演「牧水と酒」は、それぞれ素晴らしい内容で感動いたしました。

そこで、これらの講演をまとめた「講演録」を「会報」第二十六号の別冊としてお届けすべく、事務局の諸君が録音を聴いて作成してくれた原稿に目をおして、編集いたしました。

なお、ご講演くださった先生方に校閲していただくべきですが、これを省かせていただきました。誤記や誤植がございましたら、おゆるしくください。

「講演録」をお読みいただき、たのしかった雰囲気も共有していただけたら幸いです。

(林 茂樹)